
魔女狩り～旅立ち編～

FUSE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女狩り〜旅立ち編〜

【Nコード】

N1616C

【作者名】

FUSE

【あらすじ】

魔女狩りシリーズ第2章。10年前両親を失い、その5年後には唯一の姉弟である姉も出て行き、ひとりぼっちの主人公。その主人公が自立する一步を描いた物語。注）この章の主人公は陸奥和樹です。けど魔女狩りという物語の主人公は鬼庭隼人です。これを読む前に出会い編を読むことをオススメします。

第1話：10年前の過去

10年前。

当時6歳の僕は9歳離れたお姉ちゃんと、お父さんとお母さんの4人で神社の夏祭りに来ていた。

僕にとっては始めてのお祭りで、たこ焼きやわあためなどのいろんな食べ物の屋台、

金魚救いや射的などのゲームの出店、どれも僕にとっては新鮮で一生思い出に残るいい思い出だ。

でもそのいい思い出は、一瞬の内につらい思い出に変わってしまった。

お父さん達とはぐれ、お姉ちゃんと2人っきりの時に、ちょうど境内の中心で大きな爆発が起こった。

「お姉ちゃん、何この大きな音」

その時の僕は周辺に太鼓やみこしの担ぎ声同様、この爆発はごく自然なことだと思った。

「和樹、逃げるよ」

お姉ちゃんに強引に手を引っ張られ、人波と同じ方向に走った。皆も一斉に爆発と反対側に走り、僕はお姉ちゃんの手を握っとくだけで精一杯だった。

「クツカツカツカ、焼き尽くせ、この中の何処かに裏切り者がいるはずだ」

鳥居の上で60〜70歳くらいの老人が両手を挙げて立っていた。再び爆発起こり、今度は入り口の方からだった。

「逃げ道が塞がれた」

「お姉ちゃん？」

僕はその時初めて危機感というものを知った。

これはお祭りのアトラクションみたじゃなくて、事件なんだと。

「綾乃、和樹、こつちよ」

人波にはぐれた所からお母さんの声が聞こえ、お姉ちゃんとともに、その人波から這い出た。

お母さんのいた場所は、木々に囲まれていて割といろんな方向からの死角になっていた。

「綾乃、和樹、時間がないの。お母さんの最後のお願い聞いてくれる？」

「最後つて・・・？」

「時間がないの。和樹、あなたはこれを肌身離さず持っていないさい」
僕の質問に答えず、お母さんは、50センチほどの割と大きい短剣を僕に渡した。

「これは？」

「それは私達代々伝わる3大家宝ソウルイーターよ。あなたにはこのソウルイーターの短剣、綾乃には紋章を託すわ」

そう言つて、お母さんはお姉ちゃんのほうに向き直した。

「綾乃、その紋章を使えばあなたたちは生き残れるはず。急いで、綾乃だけが頼りなんだからね」

「お母さん」

爆発はすぐ近くまで来ていた。

この神社全てを爆破させるつもりみたいだ。

生き残った人たちももうほとんどいない。

「綾乃、和樹を頼んだわよ」

そう言つて、お母さんは森から抜け出し、あの鳥居の上に立っていた老人のほうに向かって行つた。

「和樹こつちよ」

【ソウルイーター・契り】

半径3メートルほどの紫の球体に包まれ、その球体から出られなくなった。

その瞬間大規模な爆発が起こり、僕の周りの森も一瞬で一掃され、

周りはいく平坦な焼け野原になっていた。

人ひとり残っておらず、遙か地平線上全て平面で、この世界には僕とお姉ちゃん2人だけかと錯覚するくらいだった。

でもそれはただ1つの地域がなくなっただけしか過ぎなかったけど、僕の生まれた町は幽霊タウンになってしまった。

お父さんとお母さんの行方は知れず、僕とお姉ちゃんは親戚の家で居候することになった。

最初は『あの爆発で生き残った子供』と呼ばれ、ちょっとした有名人気分だったが、日に日に不気味がられ、今では悪魔呼ばわりだ。

それから5年後、成人したお姉ちゃんは、お父さん達を探す旅に出た。

僕も行きたかったけど、最低中学は卒業しなくてはいけないらしいので、それを理由に断られた。

でもそれから1ヶ月ごとにお姉ちゃんから手紙が来るようになった。

最初は他愛もない手紙だったけど、ある日あの事件に関しての情報が書かれた手紙が来た。

その内容はお父さんもお母さんも既に他界していたこと。

そしてあの鳥居に立っていた老人はお父さんとお母さんを探していたこと。

最後にあの老人の正体。

でも正体がわかったとだけ書いてあって、名前とかは書いていなかった。

その内容の手紙以来、全く手紙が届かなくなって、お姉ちゃんの行方もわからないままになった。

そして今、俺、陸奥和樹^{むつかずき}は16歳。

中学をでて、姉ちゃんの後を追うつもりだったが、ある厄介なことが起きて、まだこの町に留まっている。

それはこの町には魔物が現れる。

毎日その魔物の被害にあうのは100を超えているらしい。

その魔物退治するのが、俺の役目だ。

一応育った町でもあるからな。

普通の人間の俺が何故そんな魔物と戦えるかはこの短剣のおかげだ。

母さんから貰った短剣ソウルイーター。

後から姉ちゃんから聞いた話だと、このソウルイーターは陸奥の血を引くもの以外は扱えないらしい。

例えば俺の短剣だと、他の人だと持てないらしい、お姉ちゃんの紋章だと継承できないらしい。

全部で3大家宝というくらいだから、3つあるらしいが、あと1つは俺も知らない。

多分お父さんが持っていてそのままなのだろう。

まあ、例えば誰かがそれを見つけても、どうすることもできないけどな。

昼休み、校舎裏で昼寝中に予鈴がなった。

俺は昼食の残骸をゴミ箱に投げ捨て、教室に向かった。

あゝそういえばめんどくさいコトがあと一つ残っていた。

俺の席は教卓から、直線状のちょうど真ん中の席だ。

今はその席だけ、机と椅子がなく、ぼっかりと空間になっている。

いつものことだけど、窓から運動場を見たら、案の定、机と椅子がぼつんとど真ん中に置いてある。

まあ、いつものことだけど、毎日あそこに持っていく奴も大変だよな。

本鈴が鳴っても、気にせず俺は自分の机と椅子を取りにいった。これがどういふことかわかるだろうか？

俺は昔から『悪魔の弟』と呼ばれ気味悪がられている。

しかも学校内では、俺と喋れば呪われるとか、俺に触れると死んだら地獄行き確定とかそんな噂が腐るほどある。

まあ、別にそんなことはどうでもいいけど、それだったら俺を虐めたら死ぬとかそんな噂を流して欲しい。

体育の授業中の生徒とか気にせず、堂々と運動場を横切り、机と椅子を持ち、自分の教室に運んだ。

あと先生も俺のことは断固無視をする。

今のように遅れて、しかも机と椅子を持って教室に入ってきてても何も起きてないかのように授業を進める。

学校が終わると、別に喋る相手も友達もないし、家が近くの神社に寄っていく。

この神社はあの事件とは無関係の神社だ。

じゃあ何故寄っていくかというと、唯一の話相手がいるからだ。

「瞬さん、こんにちは」

「おお和樹、今日もきたか」

この人は片桐瞬さん。
かたぎりしゅん

黒髪でスポーツ狩りの男の人で、ネックレスやらピアスなどアクセサリーをハデにつけていて、見た目はかなり怖い。

っが話してみると、意外といい人だったりする。

人は見かけで判断するなどはこのことだな。

瞬さんは妹を探している最中、飢え死に仕掛けてる所を俺が助けて、この神社で寝泊りしている。

神社といっても神主もいない、小さい神社だ。

「今日も魔方陣書いてるんっすか？」

「ああ、なかなかいいのができなくてな」

用途は全くわからないけど、この人は毎日働きもせず、魔方陣の書き消しを繰り返している。

魔法でも使う気か？この人。

その日は挨拶だけして家に帰った。

家にとっても当然一人暮らしではなく、10年前から居候している親戚の家だ。

最初は居候の身のくせに手伝えだのうるさかったが、今は断固として無視に徹している。

毎月に部屋に3万だけ置いて、あとはそれっきりだ。

要するに金と寝る場所だけはやるから、あとは勝手にしろ状態だ。でも俺にしてはそっちの方が助かるけどな。

さて、暗くなってきたし、そろそろ行くか。

行くとは日課の魔物退治のことだ。

これ以上被害がでるのはごめんだからな。

「さて、まずはどこから片付けるかな」

場所は大きく分けて3つある。住宅街、商店街、学校の3つだ。

住宅街での被害が一番多いが、雑魚ばかりだ。

商店街の魔物は雑魚からごつい魔物まで豊富に揃っている。

一番難関なのは学校だ。

昼間は全く大丈夫なのに、夜になると大型の魔物がうじゃうじゃいやがる。

居残りとかしたら、即あの世行き確定だ。

「じゃあ今日は住宅街から行きますか」

腰にソウルイーターをかけ、のんびりと住宅街に向かった。

第1話：10年前の過去（後書き）

魔女狩りシリーズ第2章の一つ目です。

第2話：悪魔の子

「48、49、50匹！」

住宅街に着くまでもう50匹も倒しちまったぞ。

まあ、雑魚のゴブリンばかり倒しても治安がよくなるわけじゃないしな。

それにしても住宅街には魔物はからつきしだな。

昨日もそうだったし、俺みたいに魔物と戦ってる奴がいるとか？

今まで2年間1日休まず魔物退治してるけど、そういった奴は一人もいなかったし、一人ぐらいいてもおかしくはない。

ついで言っと、魔物が現れ始めたのが2年前だ。

昔から現れていたわけではない。

「それじゃあ次の商店街に移動するのでしょうか」

意味もなく住宅街にいてもしょうがないからな。

流石に商店街の魔物まではいなくなっではいなかった。

でもいつもより数は少ない。

しかも大型の魔物が1匹もないのが気になる。

「これぐらいなら数分で片付くな」

魔物の位置を把握し、俺はソウルイーターを抜き、地に刺した。

その瞬間、魔物の真下から黒い光が魔物を一瞬で突き殺した。

少々甲羅が硬い魔物なら、跳ね返したりするのだが、今日は本当に雑魚しか残ってなかったらしい。

「この調子だと学校まで進めそうだな」

いつもなら時間をかけすぎて、この辺りで終わるのだが、今日はいつもの半分も時間が余っている。

それに今日は雑魚日和らしい。

学校に移動中も次々に襲ってくるゴブリンをサクサク倒し、数え

てはいないが既に100匹は超えているだろう。

そして校門前、流石に雑魚ばかりではなくなってきた。

学校に入る前の一番の難関マンティコアが位置についていた。

「一匹か。闇討ちで一発で仕留めれるかな？」

【チャージ】

ソウルイーターに力をこめ、周辺に漂っている自然エネルギーをソウルイーターが吸収する。

俺も姉ちゃんから聞いたただだからどいう原理なのか、自然エネルギーが何なのかわからない。

でもなんとなく予想はつくがな。

どこまでチャージできるのかも、よく理解してないがそろそろ十分だろ。

【ソウルファイアー】

ソウルイーターの短剣から、マンティコアに紫の炎が迸はなった。

マンティコアはガオーと叫びながら倒れかけたが、踏ん張り視線を俺に向け走ってきた。

やっぱ一発で倒すのは考えが甘かったか。

でも奴は弱ってるはず――

学校から校門を飛び越え、5匹のマンティコアも先頭のマンティコアに続いて、俺に向かって走ってきた。

おい待て。いや、待ってください。

6匹も一気に相手できるか。

だから学校は嫌なんだよ。

無性に難易度は高いし、桁外れの魔物が迂回してるし、昼間平和なのがうそみたいだ。

俺は全速力で走って家に逃げ込んだ。

逃げるが勝ちつてのはこういうことだな。
殺されたら洒落で済まないからな。
これで今日の魔物狩りは終わった。

翌朝、コンビニで朝飯代わりにパンを買い、夜とは違う平和な通学路を歩きながら、パンをかじっていた。

どっかのアニメやゲームの主人公だと、ここらへんで誰かに声をかけられそうだが、俺にはそういう相手はいない。

多分この町で俺と喋ってくれる人といえば、瞬さんぐらいだろ。

校門を過ぎ、皆に挨拶してる先生を無視し、下駄箱から上靴を取り出した。

「ん？重たい」

上靴に異様な重量感を感じた俺は上靴を逆さまにした。

そしたら、床にバラバラとガビヨウの広がった。

普通は1個だけ入れとくだろ。

こんなにパンパンに入れてたら、誰でも気づくぞ。

広がったガビヨウを拾い、しまう所がなかったため一時的にブレザーのポケットに突っ込んだ。

重たくなったブレザーのポケットに穴が開かないか心配しながら、俺は教室に向かった。

今日の遊びはこれまでか。

教室を見渡して、そう確信した。

いつもは黒板に俺の悪口が書かれていたり、机が焼失してたり、いろいろあるんだが、今日は何もされてなかった。

たまにはこんな日もあるんだな。

俺は自分の席につき、1時間目が始まるまで寝ることにした。

「おい、おい、陸奥、起きろ」

いつもは起さない先生が、教科書で俺の頭を叩いた。

「なんですか？」

「これはなんだ？」

俺のブレザーのポケットに手を突っ込み、ガビヨウを机に広げた。

「これは学校の物だろ？こんなに盗んでどうする気だ」

「っち、誰かチクリやがったな。」

面倒なやり方しやがるぜ。

「帰るまでにこれを出して帰れ」

反省文10枚を俺に投げつけ、両ポケットに入ってたガビヨウを回収された。

めちゃくちや手回しがよすぎるな。

なんでその場に反省文があるんだよ。

まあ、虐めてる側も今のままだや面白くなってきたんだろ。そのまま2, 3, 4時間目をサボり、校舎裏で横になっていた。

「反省文も何も反省することかねえし」

「つと文句を言いながら、律儀に書く俺もどうかと——。」

皆が4時間目の授業を受けてる時に、俺は昼飯を食い、早めに反省文を出すために教室に向かった。

「あいつら4時間目が終わったら、速攻俺の机を持ち運んでやがるのか？」

昼休みがはじまり、まだ10分しか経っていないにも関わらず、俺の机がなくなっていた。

運動場を見るとまだ俺の机はない。

置き場所を変えたか、それとも今、置きに行く最中か。

俺は階段を1段飛ばしで降り、運動場に出た。

すると、一人の男が俺の机を運動場の真ん中にちょうど置き終わったところだ。

「おい」

運動場から帰ってきた男を俺は、靴箱で待ち構え、声をかけた。

「あ、あ、あ、陸奥……君」

何ビクビクしてるんだこいつ。

俺と同じクラスなのは確かだが、全く名前がわからん。

「何してた？」

少々怒り気味で俺はその男に問い掛けた。

ここらへんで、言っておかないとますます調子乗っちゃまうからな。今までほっておいて、今日、反省文まで書かされるハメになったんだしな。

「ご、ごめん。今すぐ元に戻すから」

そいつは半泣き状態で、俺に手を合わせて謝ってきた。

拍子抜けだなおい。

今までこんな奴が、好き勝手してたと思うと、自分が情けなくなってくる。

まあ謝ってこられたら、どうすることもできず、元に戻しとくようにだけ言い、反省文を提出しに行った。

教室に戻ると俺の机はちゃんと元の場所に戻されていた。

さっきのあいつがいるはずの席を見ると、空席でどこかに行ってるみたいだ。

まあどこに行つてようが俺には関係ないけどな。

放課後、女子の悲鳴で俺は目を覚ました。

「しまった。5時間目、6時間目寝倒しちゃった」

それは置いといて一体何があつたんだ？

女子たちは掃除道具入れを囲んで突っ立っていた。

「おいどうした？」

野次馬みたいに他のクラスからぞろぞろ集まってきているせいで、全く見えなかったが。

一人が俺に気づくと、皆俺を避けだし、綺麗な一直線の道ができた。

こういう時はいいよな。

「つな・・・」

俺は声に出来ないほどのものがあつた。

「お前、一体どうしたんだ？」

昼休みに俺の机を持ち運びしてた男が、言葉では表現しきれないほど無残でえげつない姿で、掃除道具入れに突っ込まれていた。

こりゃ骨の1本や2本折れてる問題じゃないぞ。

無理矢理押し込んだせいか、関節のほとんどが折られ、所々殴られた後もあった。

息は……

「そいつだ。そいつのせいだ」

脈を計ろうとした瞬間、一人の男が俺に指を指して、大声で叫んだ。

それに同調するがごとく、一斉に俺のほうに冷たい視線が飛んできた。

違う。俺は何もやってない。

「どうした？何があった？」

やばい先生だ。

見つかったら停学じゃ済まねえ。

俺は急いで学校から飛び出した。

違う、違う、違う。

俺は何もやってない。

俺と喋れば呪われるとか死ぬとかそんなのはただの噂だ。

そう、噂にしか過ぎない。

今までになかったことが起き、俺は混乱し、どうすればいいかわからず、家に帰り朝まで部屋に引きこもった。

とても魔物退治なんかできる心境じゃなかった。

明日俺は一体どうなるのだろ。

第3話：北条薫との出会い

今日はやけに気が重い。

本当は休みたかったが、昨日の夜、家に先生から電話があったらしい。

まあ学校に行っても言われることは大体わかってるけどな。

っへ、俺と喋ると呪われるか。

これですます俺の周りには誰も寄ってこねえな。

学校近くになると、生徒の数が増えていき、妙に視線が痛い。

しかも所々俺の名前が聞こえるのが嫌になる。

俺は学校までの道のりを早歩き行っただ。

ここまで事が進むともう誰も何もやってこないと思っていたが甘かったか。

靴箱に人殺しやら地獄に帰れやら書かれている。

ついで言うと、上靴にもそう言うことが書かれていた。

「帰るところあるなら、俺も帰りたいぜ」

教室に向かう途中、昨日の件を新聞部が大きくとりあげ、掲示板にでっかく掲載していた。

全治6ヶ月の重症、殺した動機は虐めが原因、過去にも前科あり。などなど色んな事がデタラメに書かれていた。

「重症だったら死んでないだろ。何が殺した動機だ」

しかも昨日提出した反省文も載ってやがる。

先生もグルってことか。

普通反省文とか生徒には出回らないだろ。

まあ、これで退学とかになったら、姉ちゃん探しの旅にでも出るか。

こんな町魔物に滅ぼされる。

その場を立ち去ろうとした時、誰かに呼び止められた。

「あなた、こんなこと書かれて悔しくないの？」
相手は女だ。

俺が振り返って返事をすれば、あの女もあいつと同じ末路になる。
俺は無視をして、教室まで足を進めようとした。

「あなたのことよ。聞こえないの？」

その女は俺の肩に手をかけ、呼び止めた。

「俺に触れると死ぬぞ？」

女など少し脅してやれば、すぐに退くものだと思った。

「何それ？ そんな私の知ったことじゃないわ」

ただのアホなのか、それとも肝っ玉の据わった女なのか、とにかく
こいつは全然俺のことを恐れていなかった。

それに制服のリボンが青ってことは、この人2年生か。

因みに1年は赤で3年は黄色だ。

しかも今時珍しい眼鏡っ子ときた。

「それでどうなの悔しくないの？」

「もう慣れた」

こつこつ正義感が強い奴は嫌いだ。

何かと首を突っ込んできやがる。

俺はそいつの手を払いのけて、自分の教室に向かった。

こんな所にも新聞部の新聞を置いとくか。

俺の机の上に1部、後ろと前の黒板に1部づつ張られている。

「今、気づいたが、あいつって捨て駒だったとか？」

昨日の奴が黒幕だとしたら、もうこんな事は起きないはずだ。

あいつがいなくなっても尚、こんなことが続くってことは、まだ
親玉は残ってるってわけか。

「おい、陸奥。お前はこれから生徒指導室に來い」

ドアから担任が俺に向かって叫び、そそくさと消えていった。

そんなに俺に話し掛けるのが嫌なら、誰かに頼めよ。

でも授業サボれるし、別にいいか。

もしかしたら停学処分とかで帰れるかもしれないしな。

「お前がやったんだろ？」

先生の第一声はそれだった。

生徒指導室で俺一人に対して、6人の先生が俺を囲んで、まるで拷問みたいな感じだ。

「やってません」

「しらばつくれるな。生徒一同口をそろえてお前がやったと言ってるんだ」

それもおかしな話だろ、ちよつとはそつちを疑えよ。

「やってませんって」

こういうことが何百回も延々とループし、昼休みが来た。

「とりあえず、今日はもう帰れ。お前は明日から一週間停学処分だ」
そう言い残して、ゾロゾロと生徒指導室から出て行った。

一人じゃ何もできないくせにえらそうに……。

まあ、これで帰れるし、夜まで休もう。

昨日はロクに眠れなかったし、もう誰がやったとか関係ないね。

「お疲れ様」

また朝の女だ。

どうやら生徒指導室の前ですつと待つてたみたいだ。

なんでこいつは俺に関わってくるんだよ。

「厄介なことになる内に消える。俺の噂知らないわけじゃないだろ」
朝と同じような文句を言い、立ち去ろうとしたが

「うっん。知らないよ。だって私この前転校してきたばかりだもの」

この前？今はもう11月下旬だぞ。

なんでこんな中途半端な時期に転校してきてるんだ、この女。

「ねえ、ちよつと付き合ってくれない？どうせ今から帰る予定なん

でしょ？お昼ぐらい付き合つてよ」

まあ、帰つても寝るだけだし、別にいいか。

「食堂でいいか？」

「うっん。君がいつも食べてる校舎裏でいいよ」

！

こいつなんで俺がいつも校舎裏にいること知ってるんだ？

まさか今回の黒幕がこいつとか？

今までまったく気にしてなかったが、少しは警戒したほうがいいな。

「はい、今日は私のおごりでいいよ。私から誘ったしね」

そう言つて、パン3つと牛乳が入った、袋を手渡された。

ここはありがたく頂いておこつて。

毒が入ってたら入つてたで、こいつも道連れにして死んでやる。

俺はいつもの場所に腰をおろし、彼女は俺の右隣に座った。

「何か話があるんだろ？言つとくがこいつのは昔からあって、今更止めようがないぞ」

「ん？止める気なんかさらさらないわよ」

この虐めを止めるのが目的じゃないというと、やっぱり黒幕はこいつか？

「何？その疑い深い目。言つとくけど私はあなたの件には全くの無関係よ。話があるのは別の件」

別の件？まさかここで愛の告白とか？いや、それはねえな。

第一シチュエーションが悪すぎる。

しかも会つてまだ間もないし名前も知らない……あ。

「お前名前なんて言うんだ？まだ聞いてないけど」

「あれ？言つてなかったっけ？私の名前は北条薫^{きたじょうかほ}。よろしくね」

そう言つて握手を求められたが、俺はそれを無視した。

「さつさと用件を言え。さつさと言わねえと帰るぞ」

もらったパンを一気に口に詰め込み、牛乳で流し込んだ。

「せっかちな。まあいいわ、単刀直入に言うとななた登用しにきたの」

「登用ってなんだよ」

「うーんどこから話せばいいかな。私達はね、今ある組織と戦ってるの。でもまだ私達はまだ微弱でその組織に対抗できる力を持ち得ていないの。」

あなたのその戦闘能力と今まで耐え抜いた精神力は称賛に値するわ。貴方がもし私達に協力してくれるなら、私達も全力で貴方の魔物退治に協力するわ。

それに貴方は近々殺されるわ。気づいてないと思うから教えるけど、目つけられてるわよ」

おいおい、聞きたいこと山ほどあるからその辺で区切ってくれ、つと心の中で呟いたら

「何か意義を申し出たそうな顔ね」

むこうから聞いてきてくれた。

「聞きたいことは全部で4つある。1つ、北条がが戦ってる組織ってどんな組織なんだ？」

「魔女狩り。名前の通り魔法使いを狩る組織よ」

魔法使いを狩る？その前に魔法使いなんかいるのか疑うところだ。

「じゃあ2つ目、その魔女狩りと戦っている北条達のグループ名はなんだ？まさかお前一人ってわけじゃないだろ？」

「私達が属する組織は反魔女狩り連盟。その特殊部隊の魔女狩りハンターよ。クラス的にはS〜Fまで分かれているわ。」

因みに私はBランク。貴方の腕だったらDかEには入るはずよ」

はあ？俺がお前より弱いっていうわけか？納得いかなえな。

ここはそんな誘いを断って、帰りたいが、謎がまだふたつあるから、怒りを納め平常心を保った。

「3つ目、俺が目をつけられてるってどういうことだ？しかも近々殺されるって何故わかる。」

「え？本気で聞いているの？」

マジでビックリされた。

そんな殺されるって気配全くなかったし、ちょっとエスカレートしてきたかな？ってぐらいだし。

「貴方が毎晩魔物退治するのを嫌がってる人がいるの。その人が貴方の件の黒幕と言っても過言じゃないわ」

「待てよ。魔物が現れる前から俺は悪魔の子って呼ばれてたぜ」

「最初は追いつくそうと思っただけで、害がないと判断し、そのままほっておいたんでしょ。でも現にそいつは昨日行動を起こしたでしょ」

「そいつって・・・黒幕の正体を知ってるのか？」

「正体まではわからないけど、大体検討はつくわ」

検討ぐらいなら俺もついてる。

「じゃあ最後だ。お前は俺を今まで監視してたのか？昼休み、毎日俺がここにいるのも知っているし、夜魔物退治をしているのも知っていた。」

お前がここに転校してきたのも俺をその反魔女狩り連盟に誘うためか？」

「ここに転校してきたのはたまたまだけど、監視してたのは認めるわ。だからこの前から、私もちょっと魔物退治手伝ってあげてたでしょ？」

通りで魔物の数が減ってたわけだ。

「どお？悪くない話でしょ？貴方の地位も保障するし、魔物の件もすぐに解決できるわ」

「俺だけだったら無理ってみたいない方だな」

「ええ無理よ。あなたの今の腕じゃあせいぜい悪あがきしてる程度

よ」

頭きた。人を登用するとか言つといて、俺の腕じゃあこの町は救えねえだど？

「よし、わかった。俺一人でも全て解決できる所を見せてやるよ」

「何いつてるの？そんなこと不可能に決まってるんだから・・・」

「うるせえ、今日中に魔物の件は決着^{けり}をつけてやるぜ」

つと北条に指を指しながら啖呵を切った後、俺は学校を後にした。

第4話：謎の味方（前書き）

反魔女狩り連盟の誘いを断り、一人でしかも今日中に魔物の件を片付けると言い切った和樹。

そして一人で、黒幕が潜んでいる学校に向かうが・・・

第4話：謎の味方

その夜、俺は真つ先に学校に向かった。

「黒幕がいるとしたら絶対このはずだ」

しかも今日は退くことは許されない戦いだ。

謝れば済むことだろうけど、俺が北条より弱いと思われてることが気にいらねえ。

ここで俺は本当は強いって所を見せておかなくておかなくてはいけない。

当然学校の門番はマンティコアでお決まりだ。

しかも今日は2匹並んでいる。

「今度は数で脅されたりはしねえ」

俺はチャージしながら2匹のマンティコアに突っ込んだ。

至近距離10メートル前後で相手も気づき、こっちに身構えた。

「っへ、気づくのが遅かったな」

【0距離ソウルファイアー・ツイン】

ソウルイーターを横に薙ぎ払い、マンティコアの鼻先をかすめた時に発射した。

捨て身覚悟で挑んだのがよかったのか、2匹のマンティコアは1発で消滅してくれた。

だがこんなのを1匹や2匹倒したぐらいで喜んでいられない。

今日で決着をつけないといけないんだからな。

俺は門をよじ登り、堂々と運動場を横切った。

すると地面が急に青く光りだした。

よく見ると、線や模様などが書かれていた。

「まさか魔方阵？」

青く光る地面からは四足のレッドドラゴンから巨大なゴーレム、
でかいコウモリみたいなガーゴイルまで揃っていた。

しかもその数種類の魔物が無数に俺の周りを囲んできた。

「むこうも迎え撃つ準備万端だったってことか」

首と足をフル稼働して四方八方を見渡しながら、ソウルイーター
を構えた。

一番最初に先陣を切ったのは2本足で立つ格闘型の魔物、ウォー
ウルフだ。

素早い格闘技で俺に襲い掛かってくるが、それを紙一重でかわし、
下から上へ払い上げ、ウォーウルフを真つ二つにした。

その瞬間一斉に魔物たちが俺に襲い掛かってきた。

「ただでは死なねー。少しでもお前らを道連れにしてやる」

前方からの魔物の手を足で払いのけ左右の攻撃はしゃがんでかわ
し、後方の攻撃はソウルイーターで受け止めた。

我ながらすごいと思ったが、問題はここからだ。

この最悪の体勢からどうやって、攻撃に移るかだ。

俺は自ら体勢をできる限り低くして地を転がり、瞬時に立ち上が
り、見境なくソウルイーターを振り回した。

こんな所で死ねるか。

「つぐ」

急に背後から、1メートルほどある手に身体を驚づかみされた。

最強の魔物のドラゴンがこんな所に潜んでいたとは。

次第にドラゴンの手に力が入っていき、俺の体の骨はミシミシと
悲鳴をあげてきた。

「うわー」

【シャドウフレア】

どこからか飛んできた無数の黒い火の玉がドラゴンに襲い掛かっ
た。

ドラゴンが俺を手放し、そのまま消えていった。

「大丈夫ですか？」

腰まで伸びた黒い長髪の女の子が俺に手を差し伸べてきた。

「こんな所にいたら危ないぞ」

「大丈夫ですよ。ほら」

その女の子が指を指し、その先を見ると今までいた魔物の大軍が消えていた。

いや、消えていたのではなく、一瞬であの魔物を倒したんだ。

いたのは肩まで伸びた黒髪の女の子と、茶髪でボサボサ頭の眼鏡をかけた男の一人が立っていただけだった。

この人達は一体誰なんだ？

「こんなに魔物に囲まれるまで何やってん。ワイらが来んかったら死んどったぞ」

男の人が如意棒を肩に乗せながら、俺に近づきながら言った。

「でも間に合ったんだからいいじゃない。あなたはもう家に帰りなさい。後は私達に任せて」

短めの髪の女の子がそう言った。

「これは俺の戦いだ。今日中に決着をつける必要があるんだ。助けくれたのは礼を言うが、後はほっといてくれ」

俺はその3人にそっくり残し、アバラ骨を押さえながら学校の旧校舎のほうに向かった。

こりゃ2、3本骨逝っちまったかもな。

何かあるとしたらこの旧校舎だ。

誰が見ても空気が淀んでいるのがわかる。

なんで立ち入り禁止なのかわかる気がする。

俺は旧校舎の中に足を進めようとしたとき、さっきの女の子に呼び止められた。

「ちょっと待って」

「何だよ？止めても無駄だぞ」

「止めないよ。その代わり私達も手伝ってあげる」

これは嬉しい吉報だが、誰の手も借りるわけには……

「何を考えとるねん。このさきお前一人で行ったら、10秒も持たへんねんから、さつさとせえ」

痺れを切らした男の人が俺にどなってきた。

「10秒とか心外だぞ。取り消せ」

「なんで取り消さなあかんねん。ワイは嫌々付き合ってたつとるねん。お前に意見する権利はないんや」

「嫌々手伝ってくれるんだったら、こつちから願い下げだ」

俺はそのままその3人をほつといて中へと入っていった。

しかもここは運動場と違ってまた雑魚ゴブリンばかりだ。

この調子だとこの大ボスもカスかったりな。

「……カッカッカ」

ん？どこからか笑い声みたいなのが聞こえてきた。

「……カッカッカッカ」

段々笑い声が近づいていき、地下室への階段がポツカリ空いていた。

その地下室から異様な笑い声が聞こえてきている。

この先に……

階段を降りる音が不気味に響きそれにシンクロするように笑い声も大きくなってきた。

それにこの笑い声どこかで聞いた覚えが……

つと後ろからすごい勢いで階段を降りてくる音が聞こえてきた。

「ちよつと君、ここから先は私達も一緒に行かせてもらっわ」

さっきの女の子だ。

男のほうはいないみたいだが。

でもこの2人なら大歓迎だ。

あの男は気に入らないけどな。

「私の名前は片桐音葉。こっちは私の妹の琴葉」

「よろしく」

髪の短いほうが自己紹介してくれて、長い方の琴葉という女の子が小さくお辞儀した。

片桐つで瞬さんと同じ苗字だけど、もしかして兄妹とか？
いや、ただ苗字が一緒なだけだろう。

「俺は陸奥和樹。よろしくな」

自己紹介を終わった所で、俺たちはまた階段を降り始めた。
かなり長い階段だったが、ようやく部屋らしき場所に出てきた。
奥の方では両手を広げ、地面につくほどの長いマントをなびかせているシルエットが見えた。

「カーカツカツカ、待ちわびたぞ陸奥大輔の子供と我が孫達よ」
つな・・・陸奥大輔って、何故俺の親父の名前を、それにこの子たちがあいつの娘？

「やっぱりおじいちゃん、こんな所で何してるの」
「説明せぬとわからぬか？」

そのシルエットの人は振り向きこっちに歩いてきた。
白髪のアールバックで、右目に眼帯をしていて、胸まで伸びる白
いあごひげ、多分年齢は70代くらいだろう。

「そちらから来たのは嬉しいが、まずは我が孫をしつけぬといかん
からな、大輔の子供はあとで調理してやる。それまでは・・・」

つと言った瞬間、俺の真下の地面だけ穴が開き、真つ逆さまに落ちていった。

「カーカツカツカ、その程度で死なれたらそこまでじゃと言っわけ
じゃ」

そいつは俺を見下しながら俺に言い放ち、消えていった。

「いってー」

ゴツゴツした地面に叩きつけられ、しかも背から落ちたせいで、
体の自由が利くまで時間がかかった。

辺り周辺は壁に10メートル間隔ぐらいでたいまつ付いていて、

それ以外はなにもない。

あとは俺の真下にあるゴツゴツしたのがたくさん——無数の骸骨だ。

多分ここに叩きつけられて亡くなった人たちか、もともと死んでた人が落とされたのか定かではないが、そういう人たちだろう。

「あのクソジジイまた犠牲者を増やしたのか」

誰かがこっちに来た。

俺は死んだふりをして、その場で仰向けに倒れた。

「おい、なんでお前なんだよ」

俺は薄目で相手の顔を見た。

瞬さん、なんでこんな所に・・・

しかも瞬さんの右手にはナイフが握られていた。

「悪いな、お前だけはちゃんと俺が介錯してやるからな」

そう言って、俺の首にナイフを突き刺そうとしてきた。

俺は瞬時にそのナイフをソウリイターで弾いて、瞬さんと間をとった。

「まさか瞬さんが裏で動いていたなんて・・・見損ないました」

「妹を見つけるためだ。仕方がなかったんだよ」

そいうと瞬さんは狒犬みたいな30cmくらいの生き物召喚した。

「和樹、お前にこいつを倒せたら、ここは退いてやる。いけ、シーザー」

第5話：和樹VS片桐瞬（前書き）

魔物出現を止めるべく音葉と琴葉の3人で学校の旧校舎に入った和樹。その奥には音葉と琴葉の祖父、片桐源次郎がいた。源次郎は孫の2人を相手にすべく、邪魔者の和樹は地下に落とされ、瞬と戦うことになった。

第5話：和樹VS片桐瞬

そんな狢犬の一匹や二匹俺の敵じゃねえ。

向かってくる狢犬に、俺も立ち向かい、こんな小さい小動物にソウルイーターを使うまでもなく、俺は蹴り飛ばした。

けど、確かに命中したはずの俺の足は空を切った。

蹴られる直前に俺の右足に噛みついていていた。

けど軟弱なアゴで噛まれても、さほど痛くはない。

「そんなので俺に勝てると思ってるのか？」

俺はソウルイーターで狢犬を突き刺そうとしたが、軽く避けられた。

「一撃一撃は弱くても、それを蓄積していけば、殺すことは容易だ」
そう簡単にいくか。次はもうくらわねえ。

右足のズボンには真っ赤に染まっているが、傷は浅いおかげで血はすでに止まっている。

さっきは手加減してやったが、もう手加減無用だ。

俺はソウルイーターをチャージし、何度もソウルファイアを放ったが、全て避けられた。

「遠距離に徹するか？それだと一生こいつには勝てないぞ」

「これがただ適当に撃っただけと思ってたのか？」

瞬さんの狢犬シーザーは俺の思う通りに避けてくれて、隅っこに移動させることに成功した。

隅に追いやられたら、避けるのも難しいはずだ。

「これでおわりだ」

【ソウルファイア】

避けきれないぐらいのでかいのを放ったのが、横から瞬さんがそれを弾き飛ばし、邪魔してきた。

「そいつを倒せば見逃してくれるんじゃないかなかったんっすか？」

「誰も俺は参戦しないとは言っていないぜ」

悪者はどうしてこう屁理屈ばかり述べるのか。

でも一人や二人増えようが、今更関係ないし――

「まとめてかかってこい」

俺はいつも以上にソウルイーターのエネルギーを溜めた。

「冥土の土産に見せてやるよ。俺の魔法を」

そう言っ、一瞬で自分の目の前に魔方阵を描き、その魔方阵から人体模型が現れた。

「昔の俺はここまでだったけど今は違う」

瞬さんが魔方阵に触れた瞬間、その人体模型は俺の姿へと変化した。

「これが俺の魔法だ。一度見た奴ならこのように分身を作れる。言わば身代わり人形だ」

「そう言うことだ。偽者は死ぬ」

っ、俺が喋った？

俺の姿をした人体模型は俺と全く同じ声で俺に語りかけてきた。しかも偽者呼ばわりしやがって。

「お前が偽者だろ」

【ソウルフレイム】

ソウルファイアより1段階強力な炎を放った。

「これで一網打尽だな」

俺は余裕で瞬さんと俺の偽者を倒したと思えたが、炎の中から俺の偽者が飛び出してきた。

「悪いな、俺は熱さも寒さも感じないんだよ。当然痛さもな」

そう言っ、俺にナイフで切りかかってきた。

痛さを感じないって不死身かよこいつ。

ソウルイーターで偽者のナイフを防ぎ、そいつを蹴り飛ばして、

バックステップで距離をとった。

ん？あいつ声も姿もそっくりなのに、武器だけ違う。まあ当たり前だけどな。このソウルイーターは世界で1つしかないんだから。

「つということは距離を保たれたらお前の負けってことだな」

俺はソウルファイアを連発し、距離を詰められないようにした。偽者はただただナイフで弾くばかり。

ソウルフレイムを放ちたいところだが、もう一回チャージしないと撃てそうにない。

そう考えた俺は一瞬の隙を見てチャージした。

偽者もこのチャンス逃さず、俺に突撃してきた。

もっとひきつけて放ってやる・・・あ。

チャージ中に狛犬にソウルイーターを奪われた。

「しまった」

それと同時に偽者のナイフが俺の顔をかすった。

やべえ、なんとしてもソウルイーターを取りかえさねえと・・・意識が自然とソウルイーターのほうにいつってしまったせいで、偽者の攻撃を見切れず、腹にナイフを刺され殴り飛ばされた。

「がはっ」

学校の運動場でドラゴンに捕まれ負傷してたあばら骨にも振動が届き、ありえないくらいダメージを負った。

ソウルイーターも奪われ、俺は重症、もしかして死んだか？

つと諦めていたら、急にソウルイーターをくわえていた狛犬が燃え出して消滅した。

「シーザー、一体どういうことだ？」

瞬さんは狛犬の亡骸に近づき、嘆いた。

そうか、ソウルイーターは陸奥の血を引くもの以外は持てないんだった。

正確には持てないんじゃないかってソウルイーターが拒むのか。思わぬ誤算だが、未だ不利には変わらない。

瞬さんもソウルイーターには触れずに、ただ俺たちの戦いを傍観している。

すると偽者の俺がソウルイーターを手を取った。

よし、これであいつも消滅するはずだ。

でもそいつは消滅せず、しかもソウルファイアまで放ってきやがった。

「はっはっは、どうして消滅しないか不思議そうだな。教えてやるよ、俺はお前だからな」

偽者は笑いながら、ひたすら俺にソウルファイアを放ってきた。

なんとか避けるが、避けるたびにアバラと腹の傷口に響き、動きが鈍くなる。

万事休すか、こりゃ。

勝つ事を半分以上諦めた俺は、腹に刺さったナイフを抜き取り、偽者に突撃した。

「うあああああ」

「っへ、やけになったらそれ終わりだぞ」

偽者はチャージし始め、ソウルフレイムを出そうとしていた。

クソ、俺の身体よ、後少しでいいから、早く動いてくれ。

自分の身体にムチを打って、なんとかソウルフレイムを出すまでに近づきたかったが、少し遅かったようだ。

「じゃあな。本物だった俺」

【ソウルフレイム】

【メキドシャドウフレア】

「ぐおわあ」

何が起こったのかわからなかったが、何故か偽者の俺のほうに吹き飛ばされた。

「和樹くん大丈夫？」

えーと髪の高い方は確か・・・音葉？

「どうしてここに？」

さつき助けてくれたのは音葉だったらしい。

「音葉、音葉じゃないか」

瞬さんが嬉しそうに音葉に話し掛けてきた。

「お兄ちゃん、どうしてこんな所に？もしかしてまたおじいちゃんと手を組んで……」

「音葉、それは違う、お前たちを探すために組んでただけで、好き好んであんなクソジジイの言いなりに」

つとその時、吹き飛ばされた俺の偽者ががれきの山から飛び出てきた。

「いつてえな。どこのどいつだ」

「え？え？和樹君が二人？」

音葉は俺と偽者の俺を何回も見比べた。

「離れる音葉、そいつは偽者だ」

瞬さんは、音葉に離れるように指示し、それに従うように音葉は俺から距離をとった。

「どういうことこれは？」

音葉が瞬さんに尋ねた。

「あいつはクソジジイ作った人造人間だ。それを今、俺と和樹で破壊してるんだよ。な？」

そう言って、瞬さんは偽者の俺に同意を求めた。

「そういうことだ音葉。簡単に言えば、源次郎の味方してるのは音葉のほうだ」

あの偽者野郎、ペラペラと嘘ばっか言いやがって。

「音葉違う。あいつが偽者だ。瞬さんの魔方陣から出てきた俺の分身だ。」

必死に俺が本物だと訴えたが音葉は黙っているだけだった。
考えているのか、それとも迷っているのか、俺と偽者を何回も見比べている。

「わかった。お兄ちゃん、1つお願いしてもいいかな？」

「なんだ？」

「お兄ちゃんの目の前の魔方陣を消して。そしたら偽者は消えるはず。それで誰が本当のことを言ってるのかわかる」

「お、音葉、お兄ちゃんの言う事を信じてくれないのか？」

瞬さんは妙にうろたえている。

「そくだよ音葉、この魔方陣は瞬さんの魔方陣とは全く別の物だから消すとまずいんだ」

偽者のほうもうろたえているぞ、むしろ消されたらやばいってことか。

「音葉、何が起こるか知らないが、それで真実がわかるなら消せ」

「お前は黙っとけ」

【ソウルファイア】

偽者の俺が急に怒り出した。

俺は紙一重でそれを避けきり、音葉の方に近寄った。

「大丈夫？今治療するから」

音葉はそう言って緑のビー玉サイズの水晶を取り出して、俺に向けて呪文を唱えだした。

すると、身体の痛みが消え、傷も治ってきた。

それと同時に緑の水晶は砕け散った。

「お兄ちゃん、私はこっちの和樹君を信じるよ」

「音葉、お前とは戦いたくなかったんだが仕方ない。どっちが正しかったか兄として教えてやるよ」

第6話：魔物問題との決着（前書き）

瞬との戦いに苦戦していた和樹だが、音葉が助けに来てくれたおかげで、体勢を立て直すことができた

第6話：魔物問題との決着

音葉が戦列に加わってくれるのは嬉しいが、瞬さんも参戦してきては意味がない。

ここは俺の偽者を音葉に任せて、俺は瞬さんを……いや、それじゃあソウルイーターを取り返せない。

その前にソウルイーターを取り返せないと、俺の戦力は悲しいが0と等しい。

「音葉、まず俺の偽者が持っている短剣を取り戻したいのだが」

「あれね、じゃあ和樹君はここで待ってて」

瞬時に判断した音葉は、2人の所へ突っ込んだ。
バカ、二人相手に……

【シャドウフレア】

瞬さんに目くらましがわりの炎を放ち、偽者の俺の前に、大きな黒い騎士が現れた。

「デュラン、時間稼ぎお願い」

どうやら音葉が召喚したみたいだが、瞬さんの召喚した狒犬に比べて10倍以上でかい。

デュランと呼ばれた騎士は、大きな剣で偽者の俺を何度も上下左右から叩き切り、偽者はそれを防ぐので精一杯のようだ。

「音葉には手をあげたくなかったんだが……許してくれ」

「その前にこれを消せばこっちのものよ」

音葉が今いる場所は偽者の俺を呼び出した、魔方陣の上だった。そして音葉は向かってくる瞬さんに目もくれずに魔方陣の消したすると、偽者の俺は霧のように消えていき、その場にソウルイーターが落ちた。

俺はすぐにソウルイーターを拾いに行き、音葉の援護を試みたが、

音葉の姿が見当たらなかった。

しかもさっきまでいた黒い騎士も消えていた。

「ちよつと異次元に閉じこめただけだ。和樹を殺せば解放する。あれでも俺の妹だからな」

いつもの瞬さんじゃない。

今の瞬さんは殺気に満ち、まるで何かにとりつかれているみたいだ。

上等だ。こういう窮地に一回立ってみたいと思っていたんだ。

今までは魔物相手に全く雰囲気が出なかったしな。

それに使ってみたい大技もある。

【アトミックマインド】

先手を打ってきたのは瞬さんだ。

周りの景色が揺れ、普通に立ってるのがままならないぐらい、気がわるくなってきた。

状態異常が何か？

とにかくこの状況だと視野まで狭くなっちまうし、何とかしなくては。

【ソウルイーター・浄化】

ソウルイーターを地面に突き刺し、異常現象を抑えた。

「な、一体どういうことだ」

ソウルイーターの固有技は3つある。

誓い、裁き、浄化の3つだ。

しかも効果は1つだけではない。

攻撃、防御、補助の3種類の効果があり、分かりやすく言えば9つの固有技があるってことだ。

因みにさっきのは補助の浄化だ。

「これからは俺のターンだぜ」

ソウルイーターの矛先を瞬さんに向けた。

「それで勝ったつもりか？こっちにはまだ奥の手が・・・」

「早くださねえと死ぬぞ」

こっちは遊んでるヒマはねえし、必死なんだ。

敵の奥の手まで待つてられるか。

「なら見せてやる」

【ソウルイーター・裁き】

「ぐはっ」

瞬さんが魔方陣を書いてる途中に、頭上に円を描くように8本のソウルイーターが現れ、一直線に瞬さんを貫いた。

「っふ、和樹、なかなかやるじゃねえか。でも次はこうは行かねえぞ」

そう言つて、瞬さんは段々薄くなって、消えていった。

「消えた？まさか逃げたのか？」

それより、音葉が心配だ。

異次元に飛ばしたつていつてたが、大丈夫なのか？

辺りを見渡すと、壁に小さな魔方陣があった。

しかもその中は水が入っていない水槽みたいになっていて、音葉がその中に入っていた。

消そうとしてもこれは消えないみたいだ。

だったら方法は1つ。

【ソウルイーター・浄化】

魔方陣にソウルイーターを突き刺した。

すると魔方陣が光だし、中から音葉が飛び出てきた。

失敗したらどうなることかと思つたが、うまくいってよかった。

「和樹、ありがとう」

「おや、礼を言うのはこっちだよ」

一人じゃ死んでたかもしれないしな。

「でもまだ上にいるんだろ？お前のじいちゃん」

「多分大和君が倒してくれてると思うけど、一応急ごつか」

大和ってだれだ？あの眼鏡男のことか？

音葉は駆け足で、来た道を戻り、俺はそれについていった。

「でもなんで、俺が本物だってわかったんだ？」

「え？あくあれね。赤の他人のおじいちゃんのことを名前で呼ぶはずないじゃん」

そう言えば確か、俺の偽者は音葉のじいちゃんのことを名前で呼んでたな。源次郎だっけ？

あ、あの笑い声……思い出した。

10年前の祭りの時にいた奴だ。

しかも親父の名前を知っていた。

あいつが諸悪の根源なら全てがわかるはずだ。

「つよ、遅かったなあ」

でも既にとき遅し。

旧校舎は姿は姿形もなく、がれきの上に、あの眼鏡男と琴葉が並んで座っていた。

「おい、音葉のじいちゃんはどこだ？」

「なんや？ワイのことを『おい』呼ばわりかい？ワイには光明寺大和って名前があんねん」

名前なんかどうでもいいんだよ。

「音葉のじいちゃんをどうしたか聞いてんだよ」

「訂正する気なしかい。まあええわ。あのじいさんなら逃げられたわ」

逃げられただと？せっかく姉ちゃんの居場所がわかったの

に。

「なんで逃がしたんだよ」

「影武者やったからしゃあないやろ」

バレバレな嘘ってまるわかりじゃねえか。何が影武者だ。

「それより音葉、あいつが最後の影武者やったんちゃうんか？めっちゃ強かったで」

「多分そう。次に会うのが多分本物」

この人たち一体なんの話をしてるんだ。

この音葉って人も今落ち着いて考えてみたら普通じゃないよな。

あの黒い騎士は何処か出てきたんだ。

それに旧校舎を全壊って人間業では無理だぞ。

「ほな、日も上がってきたし、そろそろズラかるか。ワイらにはこれをもとに戻す技は持ち合わせてへんし」

光明寺はそう言ってスタスタと先に一人で行ってしまった。

「そう・・・だね、それじゃあ和樹君、悪いけど後はお願ひね」

音葉は両手を合わせて、謝りながら光明寺のあとを追った。

「それでは和樹さん、またどこかで」

琴葉はワザワザ俺の目の前でお辞儀をして2人のあとを追った。

俺はこんな所に残ってていいのか？

これでもう魔物は出てこないはずだ。

そしたら、こんな町なんかすぐに出て行って、姉ちゃんを探しにいけうはずだ。

世の中には俺より強い奴がいるのをさっきこの目で見たばかりだ。これから先、あんな奴と出くわしたら、一人で切り抜けられるのか？

その前に行く当てがない。

無作為に探し回っても無駄だし、だとしたら結論は1つ。

「あの人たちについていこう」

学校とかもうどうでもいい。

家でも煙たがられてるし、急にいなくなっても誰も心配なんかない。

俺は急いで3人の後を追ったが、運動場の所ですんなり追いついた。

「おい、俺も一緒に・・・」

つと言いかけたとき、誰かと対峙しているのが目に入ってきた。

反魔女狩り連盟の北条達だ。

つということはあの3人は魔女狩り？

考えても仕方ない。

「おい音葉、どうした？」

音葉の隣まで移動し、北条達を見据えた。

向こうの人数は北条あわせて4人。

多分反魔女狩り連盟の仲間だろう。

「あ、やっぱり貴方も一緒だったのね。本当にその日で決着つけちゃうからビックリしたわ」

北条はほとんど期待はしてなかったみたいだな。

そりゃ俺一人だと確かに死んでたかも。

「話をそらすな。用がないんやったらさっさと消えろ」

光明寺はやけに苛立っている。

「嫌よ。幹部会であるあなたを、ここで仕留めないわけにはいかなからね

それにこれ以上ないくらい体力を消耗してるじゃない？これほど絶好な機会はないわ」

そう言つて、北条があごで合図した瞬間、残りの3人は武器を取り出し、一斉に襲い掛かってきた。

北条は光明寺の所に行つて、俺のところには、でかい十文字槍を持った色黒のおっさんっが襲ってきた。

おっさんと言つても歳は30前後だろう。

「坊主、この一撃をうけられるか？」

頭上でプロペラみたいに関十字槍をブンブン回しながら、スピードを殺さず一直線に叩き落してきた。

俺はそれをソウルイーターでガードするが、あまりに重い攻撃だったらせいで、足が耐え切れなくなり、膝を折った。

「そんなんでダウンするようじゃ、まだまだだな」

そのおっさんは槍を逆に持ち、持ち手の方で俺の頭に、思い切り叩き落した。

なんだ、こいつ・・・ケタはずれのパワーじゃねえか。

クソ、音葉たちは、未だ奮戦してるつてのに情けねえ・・・

俺は意識が朦朧もろうとしている中、最後に俺の相手をしていたおっさんが音葉達にの所へ向かった所で意識を失った。

本当に情けねえ・・・

第7話：魔女狩りハンター入り（前書き）

音葉達についていくことを決めた和樹だが、途中魔女狩りハンターの邪魔が入り戦闘に。

しかも和樹は一撃でやられその場に気を失った

第7話：魔女狩りハンター入り

「綾乃、和樹、このソウルイーターは時として兵器と化す。兵器と言ってもかわいいいもんじゃない。破壊兵器だ。」

そのためにお父さんたちはこのソウルイーターを3つにわけ、その力分散させた」

「でもどっちみち私達の家系以外は使えないのですから、分ける必要などなかったんじゃないの？」

「そうなのだが、どこにいつても特例は付き物だ。私達の家系以外でも使える奴はいる。」

そいつがいい人かも悪い人かもわからない。だったら例え奪われたとしても、3つに分けていれば

残りの2つを死守すれば、兵器にはならない。そのために綾乃、お前にはこの紋章を預かってほしい」

「わかった」

「和樹、お前にはまだ早いからもうちょっと大きくなってからな」
「うん」

「——っっ」

あまりの頭の痛さに目を覚まし、飛び起きた。

「ここは……」

俺はベッドの上で、周りにはカーテンが引かれていて病院みたいな感じた。

「それにしてもあんな昔のことが夢でまた見ることになるとはな」

枕もとにあったソウルイーターを手にとり、姉ちゃんのことを思

い出した。

そういえばさっきの夢、父さんはもちろん、姉ちゃんの顔もはっきり見えなかった。

姉ちゃんを探しに行くとしても、手がかりはソウルイーターの紋章だけだ。

そう言えば、音葉達はどこに？

北条の仲間に思い切り頭を殴られ気絶しちまったけど、あの3人は無事なのか？

3人を探しに行こうと、ベッドから降りた瞬間、カーテンが開いた。

「あら、起きたのね。よかった。猛の奴手加減つてのを知らないんだから」

ほ、北条、なんでお前がこんな所にいるんだ？

「ん？何その顔？別に取って食ったりしないわよ」

「音葉達はどこだ」

俺はソウルイーターを抜き、いつでも北条とやりあえるように準備した。

「助けてもらって第一声がそれ？あの3人なら逃げられたわ。あなたを残してね」

なんだ無事だったのか。

「それで俺を捕らえてどうするつもりだ？」

「何って反魔女狩り連盟に入ってもらうつもりよ」

北条はさっきまで俺が寝ていたベッドの上に腰を下ろした。

「嫌に決まってるだろ。俺は音葉達についていくって決めてるんだ」

そう言い残して、部屋から出て行こうとした。

「じゃあこうしない？このまま出て行っても、あの3人を探すのは困難でしょ？」

あの3人のうちの男の方は魔女狩りよ。私達と一緒にいれば、必ずまた会える。そしたらあなたの好きにしていいいわだからそれまでの間・・・」

「いいだろう。でも音葉達を見つけたら勝手に降ろさせてもらうかな」

向こうはそれまでの間、俺を利用するつもりなんだろうが、そうはいかない。

利用するのはこっちのほうだ。

「それじゃあ正式に登録する必要があるからついてきて」
そう言われ、俺は北条の後ろについていった。

「北条、登録ってなんだ？」

「貴方には反魔女狩り連盟にじゃなくて、その魔女狩りハンターに入ってもらおうの」

連盟の方だと、連盟長とかに会わなくちゃいけないから、面倒なのその分、魔女狩りハンターのほうだったら、名前登録だけで終わりのな」

なんとも簡単な登録システムだな。

「分かりやすく言えば仮登録みたいな感じかな。因みに私はちゃんと連盟からの直属だから」

つと説明され、でかいドアに突き当たった所で止まった。

北条はその部屋の横にある、四角い枠に人差し指を当てた。

するとドアが自動的に開いた。

「どうなってるんだ？中から誰かが開けたのか？」

「私の指紋で開いたの」

「はあ？指紋で開くって意味がわからねえぞ」

「いいからこっちに来て」

その部屋は機械やらコンピューターがごちゃごちゃしていて、まるで別世界のようなだった。

「じゃあここに名前を打って」

つとモニターにひらがなが五十音順に並んでいた。

「打ってる？」

「何あなた？タッチパネルも知らないの？」

タッチパネル？聞いたことはあるが詳しくは知らない。

「指定のひらがなの上に、直接画面に指を当てるの。そしたらコンピュータが勝手に反応してくれるわ」

おお、ほんとだ。『む』の所を押すと名前欄に『む』って出たぞ。何か北条が呆れた視線で、俺を見てるからさっさと終わらそう。

「このコンピュータは精密だから、あなたの指紋も読み取るから、他の人にはあなたの情報を見ることはできないわ」

おお、時代はこんなに進歩していたのか。それとも俺がただ無知なだけか？

「あなたね。一回一回驚いてないで、さっさとやってくれる？」

これでも早くしているほうだぞ。

それより記入事項が多いんじゃないのか？

性別とか年齢とかどうでもいいだろう。

ともかく俺はこの後30分近くかかって、全ての入力を終えた。名前登録だけじゃなかったのか？

とにかく一字間違えて、消し方が分からず『あああああ』と打ったり、次の項目にいくのに分からず、戻りまくったり

ド素人オーラを放ちまくってる俺に、北条は何回も呆れた顔で修正していった。

「はあ、これで登録は済んだわ」

つと深いため息をつき、疲れきった顔で俺の情報を開いてくれた。

「顔写真まで写ってるじゃねえか。いつ撮ったんだよこんなの」

「あなたがタッチパネルに夢中になっっている間よ。その画面はカメラにもなってるから」

なんかここにきて、驚かされてばかりだな俺。

情報と言うのは、いわゆる個人情報とあとはここでの内部情報のみだ。

ランク、クラス、成果とかあるが全て空白だった。

「次は実力テストよ。これであなたのランクとかすべて決まるから、慎重に取り掛かりなさい」

そう言われ隣の部屋に入れさせられた。

「まずは体力からね」

北条がそう言った瞬間、急に身体が重くなった。

「な、なんだこれは・・・」

上に何十人も人が乗っている感じで、押しつぶされそうな感覚だった。

「重力を10倍にあげたわ。それで3分間動き回ってみて」

バカ言っつな。立ってるだけでやっとなのに動き回れるはずねえだろ。

足を一步出すだけでも、倒れそうなくらいなのに、こいつ俺を殺す気か？

「ほら、固まっていなくて動いて動いて」

動けるかー。お前も一回ここにきてこれを味わってみろって。

「はいじゃあここまでね」

「はあはあ」

重力が元に戻った瞬間、俺は尻餅をつき、その場に寝っ転がった。

「それじゃあ次は技能ね。あなたの力みさせてもらっつわ」

つと次々とゴブリンが俺の部屋に入ってきた。

「バカかお前。この状態で戦えるわけないだろ」

つと突っ込んでる余裕もなく、俺はソウルイーターを抜き応戦した。

しかも俺の知ってるゴブリンとは遥かに強く、かなり押され気味だった。

「それは我が連盟が作り出した、ゴブリンイーターよ」
そんなこと聞いてないっつうの

【ソウルイーター・浄化】

地面にソウルイーターを突き刺し、ゴブリン全てを一掃した。

「中々ね。それじゃあ次はこれ」

マンティコアじゃねえか。しかも俺が知ってるマンティコアじゃないってことは……

俺は恐る恐る、北条の方に目をやった。

「ご覧の通り我が連盟が作り出した、マンティコアG2よ」

G2って何の意味だよ。

でも一匹だけってのが不幸中の幸いってやつか？

【ソウルフレイム】

早めに決着をつけたく、今までチャージしていた分を全て放出させた。

マンティコアG2は全く身動きせず、ただその場に突っ立っているだけだった。

「楽勝じゃねえか」

っと思った瞬間、G2は口を大きく開け、俺のソウルフレイムを飲み込んだ。

しかもそれをこっちに向け吐き出した。

無茶言っつなよ。ソウルファイアならともかくソウルフレイムは簡単に避けれる比ではないぐらいのでかさだ。

「ぐわー」

俺は成す術もなく、自分で放ったソウルフレイムを受け、その場に倒れた。

「そこまでね。戻っていいわよ」

そう言われた瞬間、身体の傷も癒え、部屋のドアが開いた。

「どついうことだ？」

隣の北条がいる部屋に戻り聞いた。

「一種のシミュレーションよ。あなたはさっき本当に、あのゴブリンとかマンティコアと戦ってたわけじゃないの」

「はあ？ いや、戦ったぞ、ちゃんと痛みもあったし、危機感も感じた。」

「説明はしないわよ。したって無駄だと思うし。それよりこれがあるあなたのデータよ」

「お、さっきまで空欄だったランクとクラスのところが埋まってるじゃねえか。」

「ランクはD、クラスはA。なんだこれ」

「そのままの意味よあなたはDランクでAクラスに分類されたってこと。因みにあなたがAクラスの中で最弱よ」

「最弱って・・・どれだけごつい人たちがいるんだ。このAクラスには。」

「それじゃあAクラスの居室に行きましょうか」

「って言われるがまま、コンピューター室を後にした。」

「ここが私達の居室よ」

「北条が一つの建物の前で立ち止まった。」

「つで俺のAクラスの居室はどこだよ」

「だからここよ」

「ここって北条の・・・ってええ？」

「そう、私と貴方は同じクラス。改めてヨロシクね」

「北条とは一時期の付き合いになると思ったが、長い付き合いになりそうだ。」

第8話：新しい仲間達

中に入ると殺風景の玄関で、その水平線上にドアがひとつあるだけだった。

外から見たら2階建てだったのに、玄関近くに階段がないのは珍しい。

北条は何も言わずにスタスタと奥のドアのほうに歩いていき、俺は急いでついていった。

「みんなちよつと集まっつて」

ドアを開けた瞬間、大声で北条が号令をかけた。

部屋の中には男1人と女2人の計3人いた。

3人とも学校で見た奴らだ。

「今日から我が組織、そして私達と同じクラスの陸奥和樹君よ」

紹介されるのはいいが、ここは俺もよろしくぐらい言っというたほうがいいのか？

どっちもち音葉達を見つけたらこんな所抜けるんだから、馴れ合いは無用だと思ってたとき。

「始めまして、私は井上美咲。^{いのうえみさき}よろしくね」

黄色い髪のツインテールの女の子が満面の笑みで俺に握手を求めてきた。

俺より年上みたいな感じだが、背丈が低くて美人っていうよりかわいほうだ。

「よ、よろしく」

流石に無視することできずに、俺も手を差し出した。

まあ、世話になるんだし、少しぐらいいいだろう。^{ながせたける}

「俺は長瀬猛だ。あの時は悪かったな」

つと俺に後ろから肩に手を回して挨拶してきた。

肌の色は色黒で、俺よりも背が高くてがっちりとした体つきだ。

背中にはあの時俺を気絶させた十文字槍を背負っている。

「麻生穂多琉」
あそうほたる

残りの青髪の女が無愛想に自己紹介し、自分の部屋らしき所へ消えていった。

「できるだけ全員のこと名前で呼んでちょうだい。組織としてまとまりがなかったらすぐに崩れちゃうから。」

後一人いるんだけど、ある任務を執行中でここにはいないの」

そんなこと統一してもしなくても一緒だろ。

それにこいつ達も全く呼び方を統一してねえぞ。

え〜とおっさんが猛で、この女の子が美咲、さっきの無愛想な女が穂多琉で、北条が薫か。

呼べないことはないな。

「それで俺にここで何をしろと？」

「そうね、まずは基礎作りね。このまま貴方に任務を任しても魔女狩りハンターの名折れだわ」

そりゃ悪かったな。だったらこんな変な組織に入れるなっていうんだ。

「確かに坊主は戦い慣れしてるみたいだが、基礎が全くできていねえ」

「痛ててて」

猛が俺の腕を片手で掴み、潰されそうな勢いで俺は必死に抵抗した。

「悪い、軽く握っただけなんだが」

どこがだ。危うく腕一本なくす所だったんだぞ。

「しかもそれ、あんまり使いこなせてないせいか、陸奥君にとっては宝の持ち腐れみたいになっているわ」

美咲が俺のソウルイーターを掴もうとし、俺はそれを急いで阻止し、笑ってごまかした。

余所者が触れたら大変なことになるからな。

それに美咲みたいなかawaii子にそんな目に合わすのは後味悪いからな。

「こういうときは穂多琉に聞いてみるのが一番ね。この中ではあの人が一番頭いいから」

さっきの無愛想な女のことか。

「穂多琉、悪いけど和樹にこれの使い道を教えて欲しいんだけど」
確かに薫は名前で呼んでいるな。

ってか俺のこと名前で呼んだのは初めてじゃないか？

しかもソウルイーターのことはこれ扱いか。

穂多琉は机に向かって、読書をしていた。

よく見ればかなりのスレンダーでそれなりの体格もしていてチャイナ服のせいで足元が気になり目のやり場に困る。

眼鏡をいているのはマイナス点だけ。

他にも机の上にはいろんな辞書やら資料やら、壁には何かの情報をグラフィ化したものが張ってあって、見ていて頭がいたくなる・

「構わないわ」

穂多琉はこちらに見て一言言い、また視線を本に戻した。

「じゃあしっかり勉強して、いろんな知識を身につけるのよ。武力はその次でいいわ」

そう言って薫は穂多琉と二人つきりにして部屋を出て行った。

知識を身につけるって、ソウルイーターのことは俺が誰よりもしってると思うけど。

「それは早計よ」

口に出してもい無いのにこ、ちらを見向きもせず本のページを送りながら穂多琉は言葉を返してきた。

「何で・・・口に出してないはず」

「あなたの考えは十中八九わかるわ。態度、行動、言語、視線、それらを解析していけば、考えてることを当てるなど容易い事」

こいつめちやくちゃ現実離れたことを普通に言ってるぞ。

しかもそんな事できたら、世界など自分の思うように動かせるじゃないか。

それともあれか、本当は他人の心を読めるとか？

「そんな能力は持ち合わせていないわ。無駄なことを考えていないで、まずは座わりなさい」

クソ、この女かなりむかつくぞ。

絶対話をかみ合わないように仕向けたい。

などと考えながらしぶしぶ、俺は敷いてあつた座布団の上に腰を下ろした。

「そのソウルイーターのことね。先日の戦い方を見れば指摘することは山ほどあるが、いっぺんに言っても無駄でしょうね」

読んでいた本に琴を挟み、机をはさんで俺の目の前に座った。

先日の戦いつて、瞬さんとの戦いの後のことだよな？

お前はあの時俺を観察してたのか？

いや、人数はどっちも4人だったから、穂多琉も誰かと戦ってたはずだ。

「一つはソウルイーターに頼りすぎることね。それは自己防衛機能みたいのがついていて、持ち主の身体能力をアップさせる。

でもそれは身につけているときだけ。和樹はすぐにそれを抜いて戦うから身体能力が上がる機会もみすみす逃しているわ」

「じゃあソウルイーターなしで戦えってことか？」

「簡単に言えばそうね。できるだけ自分の力だけに頼り、あくまでもそれは切り札として残しておくべきね」

穂多琉の言ってることは一理ある。

この前の瞬さんとの戦いでソウルイーターを奪われた時は、まったく戦う術がなかった。

「そのために日ごろからの鍛錬を怠らないことね。一度身に付いた身体能力は衰えることないから」

ソウルイーターにそういう効果があつたのか。

「それとその武器を使わないことによって、相手にもソウルイーターの存在を知らせなくてすむわ」

ん？どういうことだ？

「それが兵器かすることは知っているでしょ？」

3つのソウルイーターが揃えばの話だろ。

「少なからず、そいつを3つ集めて、世界を征服しようとする低脳な奴が必ずいる。そいつらに気づかせないためにも隠し持つことは大事よ」

「言っておくがこいつは陸奥の血を引くものしか触れないんだ。奪われることなんてあるはずない」

「和樹の言うとおり、でも例外があるのも知ってるでしょ？ わかりやすく言えば和樹もその例外の一人よ」

つな・・・今なんて――。

「――ごめんなさい、ちょっと喋りすぎたわ。これ以上知る権利は和樹にはまだない。あとは猛と一緒に組み手でもしときなさい」

「お、おい。俺が例外ってどういうことだよ」

つと詳しく聞けず部屋から追い出されてしまった。

「どうしたの？」

「俺にはこれ以上知る権利はないんだとよ」

「あつそ」

それはそれでこいつの反応はむかつく。

そういえば猛と美咲の姿が見えないんだが・・・

まあ、そんなことはどうでもいいけど、今日はもう休みたい。

「薫、部屋はどこだ」

「そこを上がって一番奥の右が貴方の部屋よ」

薫が指を指した先にはらせん状の階段があった。

俺は言われたとおり2階に上がって奥の右の部屋に入った。

「こりやまた見事な殺風景な部屋だ」

6畳の部屋に布団が1枚。

明らか寝るだけの部屋だ。

俺はそのまま布団に倒れこみ、夜を明かした。

「坊主、さつさと起きろ」

「うるせえなあ」

「さつさと起きんかあゝ」

叫び声と共に宙に浮いている感覚が襲ってきた。

ベッドでもないのになぜ……って。

「うわー」

「いい目覚めだな」

「どこがだ。2階から落とす奴がどこにいる」

そう、俺は窓から猛に放り投げられたのだ。

「穂多琉から話は聞いているから安心せえ。ちゃんとそいつを身に付けさせてから落とした」

そいつとはソウルイーターのことだ。

ちゃっかりとズボンの中に押し込まれていた。

「さあ、朝飯ができるまでウォーミングアップといきますか」

「はあ？」

この後俺は猛に3時間もそのウォーミングアップに付き合わされた。

終わった後に気づいたのだが、起こされた時間は5時だったそう
だ。

さて、ここに来て2日目なんだが、何をすればいいのだろうか？
薫にでも聞いてみるか。

「指令がでるまでは自由行動よ。それか魔女狩りの上級クラスを始
末しにいくかね」

することないし、その魔女狩りでも始末しにいくか。

「それでそいつらはどこにいるんだ？」

「もしかして、乗り込むつもり？」

何そんなにびっくりしてるんだ？ハンターなんだろう？それが普通

じゃねえのか？

「貴方ねえ、上級クラスにはそう簡単に出会えないわよ。出会えたとしても、信徒らに体力を削られたあとでしょう」

その後、延々と魔女狩りのことを詳しく語られた。

魔女狩りにはクラスがあり、一番上のトップのことをメシアと言っらしい。

その下にいるのが幹部会、支部長官、その下が神兵、ここまでの上級クラスらしい。

そこから下のクラスのことを信徒というただの雑兵みたいなものだ。

上級クラスを倒すと、連盟から報酬がでるみたいだ。

それぞれかなりの金額が付けられているが、ある二人だけはズバ抜けて高額な金が付けられていた。

その二人とは・・・水無月龍二と光明寺大和。

メシアの額よりも高くその差、10倍以上はある。

「どうしてこの二人だけトップであるメシアより高いんだ？」

「異例の額でしょ？それほどその二人は強い。この前の光明寺大和もあそこまで弱りきってたのに、私達では歯が立たなかった」

と言ってたくらいだから、相当強いんだろう。

他にも支部やら本部やら、魔女狩りに狙われている魔法使いやらの話を聞かされ、それだけで日が暮れてしまった。

3日目、昨日と同じく、猛にムチャな起こし方をされ、昨日よりハードな訓練を受けた。

「ここにいたら、身が持たねえぞ」

朝食を食い終わり居間で休憩をしていると、薫が俺の目の前にやってきた。

「よかったわね。初の指令よ」

「やつとか。っで内容はなんだ？」

「仲間の川辺耕介を救援ね」

「誰だそいつ？」

「この前言ったでしょ？任務執行中で今はいないって。どうやら魔女狩りに見つかったみたいね」

「じゃあかなりの大仕事になりそうだな」

「そうね、今回は私も一緒にいつてあげる。貴方だけじゃ耕介と会うこともできないだろうし」

「そりゃ顔も知らねえし、そこに魔女狩りもいるんだったら、かなり危険だしな。」

「じゃあ行くわよ。一条高校へ」

高校かい！

第9話：二つのソウルイーター

高校生の魔女狩りなんかいるのか？

まあ高校生である俺が言える立場じゃないけどな。

「ここよ」

ごくごく普通の高校だ。

こんなところで魔女狩りらと戦ってるなんてうそみたいなぐらい平穏な学校だ。

「それでこれからどうするんだ？生徒でもないのに入れないだろ」

「大丈夫よ。ばれなきゃいいのよ」

バレなきゃなんでもやっていいのかよ。

つと俺たちは不法侵入し、その川辺耕介というやつを探した。

つてか今授業中だろ？クラスとかわからねえと探すのは至難のわざだぞ。

「あそこにいれば絶対くるわ」

向かった先は非公式魔術研究会の部室？

「魔術研究会ってなんだよ。こんな堂々と公開していいのかよ」

「研究って書いてるでしょ。それに非公式なんだから許可なんか当然おりてないでしょう」

でも部員は結構いそうだぞ。

部員表にも3ページくらいにわたるほどの部員の名前が書かれていた。

「多分耕介が素質のあるやつを引き込んだのね」

こんなにも素質があるやつがいるものなのか。

「とりあえず耕介が来るまでここにいましょ。いろいろ動き回るのも危ないし」

それもそうだな。知らないやつに見つかり通報でもされたら、後々ややこしい。

しばらくしてチャイムがなり、学校から生徒があふれ出てきた。その中の一人が俺たちがいる部室のほうへやってきてドアを開けた。

「薫が来てくれたのか、悪いな」

どうやらこいつが川辺耕介というやつらしい。

赤髪で額にバンダナを巻いて、髪の毛を尖らせている。

制服の着方は中途半端でネクタイもゆるみきっていて、いかにも問題児って感じた。

「こいつは誰だ？ 新入りか？」

「ええ、新しく入った陸奥和樹君」

「ども」

俺は軽く会釈をした。

「足手まといにならないようにだけは頼むぜ」

この瞬間俺はこいつとは全く馬が合わないと確信した。

「それにしても今日来てくれるとはうれしい限りだぜ」

つといいながら、耕介はいすに腰をおろした。

「奴らは今日の夜絶対に動く。もし薫らが明日にでも来てたら手遅れだったぜ」

「それはよかったわ」

「手遅れってお前にはこんだけの仲間がいるだろ」

俺は部員表を耕介に突きつけた。

「ああ、そいつらはもういねえ」

いないってどういうことだ。

あまりの非現実的な出来事についていけなくて辞めちまったのか？

「和樹、これは本当の戦いな。命を落とすことだってありうるわ」

「それに今回はそんなのがいなくても十分だ。使えない奴は最初からいないほうがマシだからな」

「だったら何でこいつらを誘ったんだよ？ 使えるから引き入れたんじゃないねえのか？」

「時間稼ぎの捨て駒」

「！」

「さっき言っただろ？使えない奴は最初からいないほうがマシってな。そいつらは使い道があったから引き入れたただけだ」

じゃあこいつら全員もう・・・死んでいるのか。

俺は怒りがこみあげてきて、今にもこいつを殴り倒しそうだった。そのとき薫が俺の腕をつかんできた。

「人にはいろんなやり方があるの。認めたくなくても、今はそんなことしてる場合じゃないわ」

つと薫に耳打ちされた。

怒りで相当腕が震えていたのだろう。

薫はずっと俺の腕を離そうとしなかった。

辺りは暗くなり時計の針は9時をさしていた。
電気もすべて消えていて、学校にはもう一人一人残っていないだろう。

その時、この部屋の外から物音がした。
「ネズミが入り込んできたみたいだな。コソコソした真似しやがって」

耕介は部屋を飛び出し、物音がしたほうへ走っていった。

「和樹、別行動は危険よ。一緒についてきて」

「あ、ああ」

俺は言われるがまま、薫についていった。

「そっちに行ったぞ」

「和樹、上」

耕介の声が聞こえ、薫の言うとおりに上を見ると誰かが上空を飛んでいた。

「任せろ」

【ソウルフレイム】

ソウルイーターからその上空にいる人に向かって、巨大な火の玉がほとばしった。

やべ、あれほど抜くなと言われたばかりなのに、また抜いちまったが仕方ないか。

俺たちはその落ちた奴の所へむかった。

「明日香」

「明日香じゃねえか」

二人が声を合わせて叫んだ。

「知り合い？」

「私の仲間だった子。こんな所にいるってことはあの人も・・・」
薫が明日香と呼んだ少女を背負い、部屋のほうへ戻ろうとした。
「ちよつと手当てだけしてから行くわ」

つと言いついて残して、薫は部屋に入ってしまった。

「和樹、不意打ちを食らわずぞ。ついてこい」

その言葉に不意打ちをくらい、薫たちと一緒に残りたかったが名残惜しく、耕介のほうへついていった。

「不意打ちをかけるってそいつらの居場所わかるのか？」

「さっきの女が飛んでいった方向から考えれば大体は見当がつく」

その明日香が飛んでいった方向は、体育館。

「奴らは絶対にこの中にいるはずだ」

壁に背を向け、そつと体育館の中をのぞくが誰もいない。

でも気配はする。

「気づいたか？あの倉庫の中が怪しい」

確かにこの時間まで学校に残るためには倉庫とかに隠れる必要がある。

だが俺の気配が感じるのは・・・
つと体育館から目を離れた瞬間、目の前の手すりの上に青髪の男が立っていた。

「とうとう尻尾を出したな」

【サーベルレイン】

剣の雨が俺らに降り注ぎ、俺は中庭の方へ逃げ、耕介は体育館の窓を突き破り、中へと逃げ込んだ。

やべ、分かれちゃった。別行動は危険だっていわれたばっかなのに。

「お前ここでは見ない奴だな。川辺を助けに来たハンターの仲間か」「そういうお前は魔女狩りか？」

やばいくらい怖い。今までの魔物退治の時と比べ、かなりの緊張感が走った。

「そこまで知ってるなら話は早い」

【バースト】

その男がそう言った瞬間、紫色に輝き姿を消した。

「うしろだ」

「がはっ」

何が起こったのか全くわからず、背中に激痛が走り、学校の3階まで吹き飛ばされた。

つく、めっちゃくちゃ早え。

立つ暇も与えられず、その男は俺の足を掴み、思い切り回した後、外へ振り飛ばした。

痛くて言葉もでねえ。ってか痛いだけじゃ表現ができないほどの激痛が体中に走っている。

そして、その男は俺の目の前に立ち、しゃがみこんだ。

「魔女狩りハンターから手を引け。そしたら命だけは助けてやる」
ありがたい。命あつてのものだからな。

薫には悪いが・・・

その時、体育館のほうから戦いの音が聞こえ、部室のほうからも爆音が聞こえた。

こういうことって、前にも・・・そうだ、初めて猛と戦った時だ。「命を粗末にするもんじゃない。魔女狩りから手を引けば助けてやるって言うてるだろ」

あんな情けない想いをするのはもうごめんだ。

「寝言は寝てから言え。あんなの毎朝猛の起こし方に比べたら痛くもかゆくもねえぜ」

フラフラになりながら立ち上がり、ソウルイーターを抜いた。

この時ぐらいいいよな。切り札を使う前に死んだら意味ねえかな。

「本当にハンターは頭が固い奴ばっかだな」

【裁き】

待て、なんであいつがその技を。

よく見ると右手にソウルイーターの紋章が宿っていた。

バカな、それは姉さんが宿してるはずなのに。

【ソウルドレイン】

とりあえず、あいつの裁きが発動するまえに吸収しといた。

ソウルイーター同士だと発動する前に吸収されるから、使っても無意味だ。

っということは俺のソウルイーターではソウルイーターを宿しているあいつを傷つけるのは不可能ってわけだ。

「お前なぜソウルドレインを使える」

「その同じ質問をお前に返してやる。なぜお前がソウルイーターを宿してる」

そのあとお互い一言も質問の問いに答えず、そいつと俺は対峙し

あい、しばしの沈黙が続いた。

「ひとつだけ聞かせてくれ。お前の名前はなんだ」

「人に聞くならず自分から名乗れ」

「悪い。俺は鬼庭隼人^{おににわはやく}」

「陸奥和樹だ」

「そうか、また会えるといいな」

そう言ってそいつは逃げていった。

普通なら追うのだが、今の俺にとってはあいつは強すぎる。

「鬼庭隼人か。なぜ陸奥の血を引いてないやつがソウルイーターを・

・」

「おい和樹、無事か」

耕介が体育館からボロボロの姿で出てきた。

まあ、俺のほうかひどいけど。

「なんとかかな」

「薫が心配だ。早く行くぞ」

つと部室へ急いだ。

「がんばったんだけどね。取られちゃった」

部室は見事に崩壊していて、薫はほぼ無傷だったが、捕らえていた明日香という少女は奪い返されたらしい。

「まあ、薫が無事でなによりだ」

それよりもどうするんだこれ？俺の学校もほったらかしにしてきたけど、ここはやばいだろ。

「今度は本格的にぶつかるべきね。穂多琉達にも救援を呼ぶわ」

薫はもう次の作戦を立てている。

後始末はほったらかしの傾向に近いだろ。

「つで明日は俺達から仕掛けるってことだな」

耕介もやる気満々だ。

もしかしたら穂多琉にあの隼人って奴のことを聞けば何か教えてくれるかもな。

「そのためには指令変更の手続きをしないとね」

「それ俺に行かせてくれないか？」

こんな所で待っておけなかった。

あの隼人が持っていたソウルイーターの紋章、それと穂多琉があの時行っていた『俺が例外の一人』という言葉、なにかが繋がっている気がした。

「これは直属に連盟に組してる人しかいけないの」

そういえば、俺は連盟にはいっていなかったんだっけな。

「委任状を使えばいいだろ。俺にもこいつより、薫に残っていてほしいし」

たまにはこいつもいいこと言うな。

「そうね、じゃあこれを穂多琉に渡して、多分あなた一人じゃ手続き済ませれないと思うから」

つとA4の茶封筒をわたされ、ずっしりとした重さに少し驚いた。その後、2人に夜が明けてから行けといわれたが、その時間ももったいなかったから、すぐにその高校を後にした。

第10話：連盟本部救援戦【前半】（前書き）

薫たちの任務の救援を頼みに来た和樹だが、反魔女狩り連盟本部でも大変なおきていた。

第10話：連盟本部救援戦【前半】

俺たちの居室に戻る際には必ず連盟の本部を通らないといけないのだが、その本部から戦火が上がっていた。

本部に急襲をかけるのは魔女狩りしか考えられない。

「救援を呼びに来たのに、これじゃあ救援所じゃねえな」

本部を見渡せる丘の上で佇みながら考えていた。

俺も加勢したい所だが、本部は包囲されていて、既に戦いは中で行われていた。

背後をつくにしても、俺一人じゃ飛んで火にいる夏の虫状態で意味がない。

「中と連絡をとれたらなんとかかなりそうなんだけど」

つと周囲を見渡すけど、何も無い。

抜け道とか本部にはあるはずないだろうし、例えあったとしても俺が知らなきゃ意味はない。

こうなったら残った敵を俺のほうにひきつけるしかないだろう。

「待ちなさい」

ソウルフレイムを敵の背後から放つため、チャージしていると、後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。

「穂多琉、なんでこんな所にいるんだ」

「和樹か薫のどちらかが救援を求めにくるんじゃないかと思ってね、なんでもお見通しってわけか。」

「でもいいのか？穂多琉が抜けたら、本部のほうも厳しいんじゃないのか？」

「だから今から追い払うのよ」

「誰が」

「私と和樹」

無謀にも程がある。

向こうは本部全体を包囲するほどの兵がいるのに、こっちは2人

じゃ殺されにくいようなものだ。

「麻生様、準備が整いました」

知らない鎧を来たおっさんが、俺たちの前に敬礼してきた。

「誰だこいつ」

「連盟長から預かった、兵長さんと500人の兵士よ」

どっからわいてきたんだこいつら。

「本部からここに抜かれる抜け道があるのよ。外から中に入れないようになってるけどね」

やっぱりどこでもそういう抜け道があるんだな。

でも500人じゃ全然足りないだろ。

「私達で補えばいい。さあ作戦会議も兼ねて、陣営の中に入りましょ」

中はテントだらけで、1つだけふた周りぐらいでかいテントがあった。

多分大将用だろ。

俺の予想通り、穂多琉とその兵長はでっかいテントの中に入って行き、俺もその中に入った。

中には椅子と机だけと言いつたってシンプルだ。

まあ長居はしないんだし、十分だろ。

つと穂多琉は上座に座り、俺と兵長のおっさんは下座に座った。

「和樹にはまだ話してないから最初から説明するわ」

つと本部周辺の地図を机に広げて、今回の作戦を話し始めた。

「敵の数はおよそ1万。そのうち中に入ってきてるのは1000、2000人。」

将は誰一人出陣してきてないから被害はまだ少ないわ。因みに敵の大將は武田毅よ。副将は足利夏樹と相馬和。

3人とも相当な腕の剣士よ。今分かっている敵の情報はこれだけ。何か質問は？」

「こっちの兵はどのくらいなんだ？」

「本部の中に5000人弱、そして我ら500人だ。しかし本部にはあのお方がおられるから大丈夫だ」

穂多琉に聞いているのに、兵長がしゃしゃり出てきた。

「つかあのお方で誰だ。」

「英雄王で有名の足立謙あだちけんいち様よ。あの人は百戦錬磨で負け知らずの男」

そんな奴がいれば一人で全員相手できるんじゃないか？

まあそんな危ないことしねえよな。

「歳が70近いのが問題だけだね」

そんな歳でよく頑張るものだ。

「話がそれだけど今回の作戦の説明をするわね。今日の夜敵軍に夜襲をかけ、本部の兵と共に挟み撃ちにする」

「挟み撃ちってこっちは500しかいねえのに、挟み撃ちもクソもねえぞ」

「不足分は私達で補います」

そんなに俺の力を期待するな。

その前にこの兵長の力がどれほどなのかが疑わしい。

「つとということで質問は？ないわね？それじゃあ時間まで待機」

その言葉でその場は解散したが、俺は穂多琉を追った。

あのことを聞くために。

「穂多琉」

本部を見渡せる丘で佇んでいる穂多琉に声をかけた。

「和樹か。なんだ？薰たちのことか？」

「それもあるが、ソウルイーターのことをもう少し知りたい」

穂多琉の横に立ち、目をあわさずお互い本部と敵陣を眺めながら

話した。

「そのことは全て話したはずだけど」

「いや、俺が例外っていう話は途中で終わっている」

「あれは今はまだ話す機会ではない」

こいつは一体何を知ってるんだ？

それを知れば何かが変わるとでもいうのか？

まあ、もう1つ聞きたいことがあるし、このことはまた今度によろ。

「あと、ソウルイーターの紋章を持ってる奴に会った」

「そうか」

あまりにも素っ気無い返事が返ってきた。

「そいつは俺の兄弟でも従兄弟でもないはずなのに、何でソウルイーターが宿っている？

それにあの紋章は姉ちゃんの物だったはずだ」

「……」

わからなかったらだんまりか。

「もういい。自分で調べる。この戦いが終わったら、俺たちのほうも手伝ってくれよ」

そう言い残し、去ろうとした時

「その紋章を宿している奴は、お前の姉ちゃんと面識があるはずよ」

「え？」

振り返った瞬間、穂多琉は俺とすれ違い、そのまま返事をするこ
となく陣営に戻っていった。

「さあ、時間だ。お前たち存分に暴れまわれ」

時刻は深夜0時。

兵長の合図とともに500の兵士達は魔女狩りの本陣に突撃した。
「和樹、将の相手を兵にはさせちゃだめよ。兵達の命が無駄になる
から。将は私達で抑えるのよ」

穂多琉が2メートル弱ある大きな鎌を、右手で持ち右肩に乗せて、
上空から敵陣営に切り込んでいった。

「かつこいい。よし、俺も」

つとソウリイターを手にかけるが、途中で踏みとどまり、武術だけで戦うことにした。

でもこんなに多勢相手に戦うのは初めてだぞ。

最初のうちは向こうも混乱していて、調子がよかったが、今はもう壊滅寸前だ。

その時ちょうど兵長が奮闘していた。

「おい本部のほうはどうなってるんだよ？」

「必ず間に合うからもう少し耐えろ」

間に合うって、こっちは壊滅状態で、耐えることもままなら・・・

・

【氷点】

「痛ってー」

「つぐ」

背後から豆鉄砲みたいのが俺と兵長の身体全身に襲ってきた。しかも服の上に氷がへばりついていて痛い。

【辻斬り】

「がはっ」

「おっさん」

茶髪でセミロングの少女が兵長に刀で切りかかり着ていた鎧は真つ二つに割れ、兵長はその場に倒れた。

「あとはあなただけね」

背後にはあの豆鉄砲みたいのを飛ばしてきた2刀流の女の子がこっちにむかってきた。

太ももぐらいまで伸びる紺色のサラサラの髪の毛で、両肩に髪の毛をたらしていて、かなり美人な人だ。

ってかこいつらまさか大将か副将か？

俺一人で二人相手も無理だぞ。

「名前ぐらい名乗ったらどうだ？いきなり襲い掛かってきやがって？」

とにかく時間稼ぎだ。なんとか時間さえ稼げば穂多琉か本部の助けが来るはず。

「いきなり襲ってきたのはそつちよ。夜襲など卑劣な真似をしておつて」

聞く耳もたず。

茶髪の子は刀で俺に襲い掛かり、俺はそれを必死にかわしつづけた。

「やめなさい、夏輝」

もう一人の女の子がそう言つと茶髪の子の攻撃が止まった。

危ねえ、死ぬかと思つた。

つてか周りは魔女狩りの信徒ばかりで、味方が一人もいねえし。

「和、何故止める？」

茶髪の子が夏樹で紺色の髪の美人の人が和か。

つということは二人とも副将だな。

「無駄な殺生は好まないの。貴方おとなしく投降するなら命まで取らないわ」

「またそんな勝手なことを。殺の命令は皆殺しよ。一人も残さず・・・つち」

つと夏輝は急に舌打ちをして、バックステップで俺から離れた。

その瞬間、今まで夏樹がいた地面に亀裂が走つた。

「残念、もう少しだったのに」

パタパタと倒れる魔女狩りの信徒の前に穂多琉が現れた。

「やるわねあんた」

夏輝は刀を構え直し、穂多琉に切りかかろうとしたが、間合いを詰められる前に穂多琉が横に鎌を振り払つた。

しかもその振り払つた場所の空気が一瞬歪んだ。

「あの武器、少々厄介ね」

夏輝は和の横に移動し、距離を取られた。

「武田毅自ら先陣をきつているとは流石ね。でもこの二人をここで足止めさせとくだけで充分戦果はあげられるわ」

その前に死んだら終わりだけだな。

「あの二人の持っている刀、各地に知れ渡る名刀よ。気をつけて」
穂多琉が俺に忠告してきた。

「あなたの武器も普通の鎌じゃないでしょ？」

「ええ、神をも殺す死神の鎌よ。切られないように気をつけなさい」
神をも殺すってどんなのだよ。

まあ見たために雰囲気はやばいけど。

「それじゃあ私の正宗の錆になりなさい」

つと再び夏輝が襲い掛かってきた。

正宗って俺でも知っている名刀中の名刀じゃねえか。

なんでこんな奴がそんな貴重な刀を。

「この人の相手は任せて」

鎌の柄の部分の地面に叩きつけて、土ぼこりをまき散らした瞬間、上空から夏輝と穂多琉が飛び出していった。

残ったのは、俺と和という女だ。

しかも戦いづらそうな2刀流ときた。

「あなたは丸腰で戦う気？」

俺だつてできればソウルイーターを抜きたい。

でもそれじゃあ強くなれない。

「遊びじゃないのよ。死にたくなかったらその剣を抜きなさい」

そう言うだけ言つて、刀を構えた。

クソ、やっぱりこいつに頼ることになるじゃねえか。

「それも普通の短剣じゃなさそうね」

「ああ、世界で最強の短剣だ」

「へえ、だったら私のコレクションに加えてあげる。名刀雪月花、雪ウサギ。切られたら凍傷を起こすわよ」

切られなかったらいいんだろ？

向かってくる和の攻撃を俺はソウルイーターで受け止めた。

その瞬間、刀を伝ってソウルイーターが凍りだした。

瞬時にバックステップで和から離れ、ソウルファイアで氷を溶かした。

「何驚いてるの？まだこんなの序の口よ」

クスクス笑いながら、和は俺の隙をうかがっている。

魔女狩りってこんな強い奴ばかりなのか。

次元が違いすぎる。

「次は殺す気で行くからうまく避けてね」

さっきと同じパターンで右から刀を薙ぎ払ってきた。

これをソウルイーターで受け止めたらさっきと同じだ。
だったら避けるしかないな。

後方を確認し、バックステップで一振り目を避けたが、左に握られていた刀が、突き出てきた。

咄嗟にソウルイーターで防いだものの、先ほど空を切った右手に握られていた刀が左から襲い掛かってきた。

「う、うわ」

俺は体勢を崩し、尻餅をついたが、一瞬で横へ飛び上がり体勢を立て直した。

「最後だけちょっとかつこ悪かったかな」

こいつ遊んでやがる。

「さあ、今度はもうちょっと攻撃回数を増やすわよ」

つと次は刀を八双に構え、突撃してきた。

俺だって無駄に避けてたわけじゃない。

さっきの攻撃でひとつ分かったことがある。

左手に握られてる刀に触れても凍らないことだ。

つとということは右手に握られている刀にだけ気をつければいいだけだ。

「俺も次からは反撃させてもらうぜ」

と叫び、自ら和の懐に向かって行った。

第10話：連盟本部救援戦【前半】（後書き）

最近暑いですねw

執筆中頭がぼーとして一時思考回路が切断されますw

感想とか書いてくれたらすごい励みになるのでヨロシクお願いします。
す。

第11話：連盟本部救援戦【後半】

【氷点】

【ソウルイーター・誓い】

激戦とはいかないが、数太刀交えた後は技の出し合いになり、不利な状況に追い込まれた。

剣士のくせに、遠距離攻撃をバンバン放つとか反則だろ。

「守ってばかりだとやられるわよ」

そんなこといわれなくてもわかってるつもりだ。

【ソウルイーター・裁き】

和の頭上に円を描くように8本のソウルイーターが現れ、一直線に貫く・・・はずだったが

貫く前にすべてのソウルイーターを叩き落した。

ってか叩き落とすとかありえない。

「あなたにはまだこの雪ウサギの能力を見切れてないのね」

雪ウサギとは和の左手に握られている刀だ。

確かに雪月花の能力はわかったが、もうひとつの刀の能力は未だわからない。

名刀と呼ばれるからにはそれなりの能力があるはずだ。

それを見切れなければ確実に負ける。

「もっと近づかなきゃ、わからないわよ」

何も考えなしで突っ込んでも、返り討ちにあうだけだ。

でもそれだと・・・

っち、考えるのは性にあわねえ。

「うおおおおお」

「これが雪ウサギの能力よ」

つと俺の頬に雪ウサギがかすめた。

「い？」

よく見ると、雪ウサギから青いオーラが発していた。

「別に傷つける必要はないんだけど、この波動に触れたものは、動きが鈍くなるの。当然人以外の動きも鈍らせることができるわ」

これでさっきの俺の『裁き』のスピードを殺して、叩き落したってワケか。

和が俺の首筋に雪ウサギを当ててきた。

今、刀を引かれれば、俺は即死だろう。

しかもこの鈍い動きが取れることがない。

ただ鈍いだけで、抵抗はできるものの、速度が全くないため、相手には蚊が止まったぐらいの感覚しかない。

この状況を打破できる力は俺には残ってないってわけだ。

「うおおおおおおお」

信徒を自慢の十文字槍でなぎ払いながら、猛が助けに来た。

「新手ね」

和は2度俺に蹴りを入れて、標的を猛に変えた。

俺はその蹴りにダメージはほとんどなく、ただ突っ立っているだけだった。

最初はどういうことかわからなかったが、数秒後その意味がわかった。

雪ウサギの能力が消えた途端、吹き飛ばされた。

さっきのダメージが今まで蓄積されて、さっき開放されたってわけか。

「隙あり」

俺が倒れている間に信徒が一齐にかかってきた。

「雑魚相手にやられる俺じゃねえよ」

その場を一旦離脱し、包囲網から抜けた瞬間、信徒を各個撃破していった。

素手でもなかなかできるものだ。

さっきの戦いの中で、たまたま見つけたソウルイーターを拾い、猛の援護に向かった。

「どけ貴様」

「っな」

長い赤髪を後ろに束ねた3刀流の男がすごい勢いで俺に襲い掛かってきた。

【漣】

見えない斬撃がすごいスピードで襲い掛かってきた。

「太刀筋をしつかり見ろ」

どこからおじいさんっぽい声が響いた。

太刀筋なんか見ても・・・そうか軌道か。

今まで避けていた斬撃を次は叩き落そうと身構えた時、一緒にそいつも突っ込んできた。

やばい、このままじゃ、たたき落とせたとしても、あの男に追撃されやられる。

避けてもあの男が持つてる三本中一本はすごいリーチが長くて、避けきれない。

こうなったら・・・

「！！！！」

飛んでくる斬撃をわざと受け、その男の攻撃を全力で防いだ。

「よくやった、あとは任せろ」

白ひげ胸まで伸び、白い短髪の老人が横から赤髪の男に切りかかり、逃げる男を追撃していった。

「あの声、さっき俺にアドバイスしてくれた人・・・」

「和樹、私達の勝利よ」

穂多琉が血のりがべつとりついた鎌を肩に寄せ、俺に近づいてきた。

周りを見ると魔女狩りは退却し始め、大将の武田毅を始め、副将の相馬和も足利夏輝の姿もなかった。

「坊主よくやった。俺たちの勝利だ」

猛が勢いよく、俺の肩に乗っかってきた。

「そうか、小僧もハンターの一人だったか」

さっきの老人が俺に話しかけてきた。

その老人を見て、猛は頭を深く下げた。

「ええ、未来の鍵を担う子よ」

穂多琉がその老人に親しく話しかけた。

「この老人誰だ」

「英雄王を知らんのか。この方は英雄王足立謙一様だ」

猛がやや怒り気味でそう言い、無理矢理俺の頭を下げさせた。

この人が百戦錬磨の英雄王か。

確かに強そうだが、威厳とかが全くないやさしそうなおじさんって感じた。

かなりの重装備をしているが・・・

このあと、その英雄王の進言で俺たちは王から予想外の褒美をもらい、居室で一息ついた。

「今からは無理よ」

そして今、その居室のリビングで俺と穂多琉は対峙していた。

今すぐ薫を助けに行きたいのが俺の意見だ。

でも穂多琉は明日にしる聞かない。

俺だけでも今すぐ、薫のところに行きたいが俺だけ行っても意味がない。

「坊主、半日早く着こうが着くまいがそんな変わらないって」

真ん中にいた、猛が仲介してきた。

「今は皆さん早く休むことが先決です。こんな言い争いしないで、明日に備えてもう寝ましょ」

猛と一緒に美咲も俺たちの真ん中に立った。

「和樹の気持ちもわからなくもない。でも今私達ではあまり戦力にならない」

そういい残して、穂多琉は自分の部屋に戻っていった。

「ああ、見えてもあいつ疲れてるんだぜ。表には全く見せねえけどな」

俺の肩を叩き、猛も自分の部屋に戻っていった。

「すいません。私の治癒魔法でも傷は治せても疲労までは……」

「いや、美咲のせいじゃねえよ」

そう言っただけ俺も自分の部屋に戻った。

「鬼庭隼人、支部の神兵か」

部屋に戻った俺は、魔女狩りの上級クラスのリストを見ていた。

「相馬和、こいつも支部の神兵か。支部の神兵である強さとかありえないだろ」

「足利夏輝、穂多琉と戦った相手だけど倒せたのか？穂多琉の鎌にはすごい血がついていたけど」

「この赤髪……武田毅、支部長官。通りで強かったわけだ。英雄王が助けに来てくれなかったら確実に死んでたな」

「光明寺大和、魔女狩りの中で1、2を争うほどの強さ。そんな強そうに見えなかったんだけどな」

俺はリストを閉じ布団の上に寝転がった。

そういえば、音葉達は今はどこにいるんだろ。

あの3人に会うために入ったっていうのに、今は魔女狩りを潰すため……。

いや、最初はお姉ちゃんを探すための目的。

その手がかりはあの鬼庭隼人が。

とにかく今日は明日に備えて休もう。

俺はそう考え、眠りに着いた。

第12話：救援

「和樹、昨日あれだけ張り切って寝坊とは何事だ」

「え？え？うわ」

意味もわからず、猛に足をつかまれ、窓の外に放り投げられた。毎回毎回無茶をしゃがって、落ちる場所を間違えたら死んじまうぞ。

運よく芝生のクッションに落ちたものの・・・

「本当に寝ぼすけね、もうお昼過ぎよ」

な、なに？

慌てて、部屋の中に入り時計を見ると短い針が1の所を指していた。

「おはようございます」

つと台所を掃除中の美咲が満面の笑みで挨拶してきた。

「お、おはよう・・・って違うだろ」

つといつのまにかノリツツコミを入れていた。

ここには薫以外まともな奴はいないのか。

「坊主、そんなに気にするな。昨日はあれだけの戦いだっただ。昼まで寝ていても全然悪くないぞ」

さっき怒ってたじゃねえか。

とにかく今は、この遅れた時間を取り戻すのが先決だ。

「俺は今から薫の所行くから、早く準備をしてくれ」

「もう済んでいる」

つと穂多琉が即答した。

「済んでるってあの書類の手続きもか？」

「愚問だ」

そう言っただとスタスタと出て行った。

そんなこと言っただと兵の一人もいないじゃないか。

「それじゃあさっさと行くぞ。急いでるんだろ？」

「え？俺たちだけ？」

猛にひきづられながら、外に出た。

「少数精鋭のほうが早く着くし、兵力の削減にもなる」

つということで、俺たち4人で薫達の援軍に向かうことにした。

移動は馬車で一条高校まで向かうことになった。

「なあ、俺たち全員、本部を空けても大丈夫なのか？」

「・・・・・・・・」

「大丈夫です。私達AクラスのほかにBクラス、Cクラスとありますし、そう何度も本部が襲われることはありません」

穂多琉の変わりに、美咲が答えてくれた。

猛は隣で爆睡してるし、穂多琉は瞑想しているのか、その場から全然動かないし、こいつら全く社交性ねえな。

「和樹君？大丈夫？」

「ああ」

相当ひどい顔をしていたのか、美咲が心配してくれた。

つてか和樹君に呼び方変わってる。

まあ、俺もまだ疲れているのだろう。

着くまで俺も一眠りすることにした。

一条高校に着くと俺らは、いや、俺だけが愕然とした。

この前まであった、非公式魔術研究会と書かれていた部室が綺麗さっぱりなくなっていた。

「どういうことだ？薫も耕介もいねえじゃねえか」

聞きたいのはこっちのほうだ。

「とにかくこのままここには目立ちすぎる。ここは一旦出るぞ」
学校はちょうど授業中だったおかげで、誰にもバレずに潜入できたけど、確かにあのままあの場所にいたらヤバかったな。

「それにしてもどうするんだ？ここまで来たからには、魔女狩りを

ぶつ潰さねえと帰れねえぞ」

その前に薫達と合流するのが先だ。

「私達は美咲と共に仮の拠点を用意しておくから、猛と和樹は情報を集めてくれ」

穂多琉がそう指示し、美咲を連れ学校から離れていった。

「よし、俺は学校外を調査するから、坊主は学校内を頼む」
つと言っただけ言っつて、去って行った。

「ちょ、学校内って魔女狩りがいるかもしれないのに」

「大丈夫大丈夫」

つといい加減なことを言いながら、猛は姿を消した。

「クソ、どうなっても知らねえからな」

誰もいない靴箱から侵入し、足音を立てず、階段を駆け上がった。どこに行くか全く考えていなかったが、とりあえず俺は屋上を目標指した。

まずはこの生徒の制服を奪わねえと、闇雲に動けないからな。

休み時間になれば、ひとりぐらいホロホロ屋上に現れるだろ、つというのが俺の考えだ。

今さっき思いついたばかりだけどな。

でもその作戦が今すぐ実行できることになるとは予想にもしなかった。

目の前に不良と思われる学生が居眠りしていた。

こいつはラッキーだぜ。

しかも男のクセに、立てば腰くらいありそうな長い黒髪が特徴的だ。

俺はそいつにしのび足で近づき、半日は目が覚めないほどの衝撃を与えようとした。

今まさにその瞬間、その不良は目を覚まし、俺の腹に両足で蹴飛ばしてきた。

「ぐは……」

人間とは思えない衝撃が襲い掛かり、壁際のフェンスまで吹き飛ばされた。

「人の寝込みを襲うとはいい度胸じゃねえか」

その不良はゆっくり俺に近づいてきた。

俺はさっきの攻撃のせいで動けずその場にうずくまっていた。

「俺に手を出したことをあの世で後悔するんだな」

やばい殺される。

一瞬でこいつはやばいやつと直感した。

手から黒い渦が漂っていて、徐々に全身に巡って、最後にはサメのようなバケモノが見えた。

反射神経でそいつの攻撃をサイドステップで避け、回り込んだ。もしかしたら、ハツタリだけかもしれない。

俺はそう言い聞かせ、回り込んだ瞬間、遠心力を利用して、回し蹴りを放った。

だがその男は振り向きもせず、片手で俺の蹴りをガードし、反撃までしてきた。

それをガードするものの、相手の破壊力が常識を超えていたため、くらう以外選択肢はなかった。

「魔女狩りか？しかも神兵並の強さだな」

「待て、俺は魔女狩りじゃねえ」

「命乞いとはみっともないぜ」

【ダークネスバスター】

「っち、マジで殺す気かよ」

【ソウルイーター・契り】

紫の結界を張り、俺はなんとか攻撃を凌いだ。

「お前、隼人の言ってたもう一人のソウリイターの使い手か」
「な、こいつ隼人を知ってるのか。」

「敵を間違えるな。俺は魔法使いだ。ハンターなら魔女狩りを襲え」
「そう言つて、その男は所定の位置に戻り、再び眠りについた。」

「おい、その隼人つて奴をここに連れてきてくれないか？」

「今日は休みだ」

「そいつは目を閉じたまま答えた。」

「困つたな。ここで会つた魔女狩りは隼人ぐらいだ。」

「他にも隼人以外にこの学校に魔女狩りがいるのか？」

「神兵が一人と支部長官が一人いる」

「つということは3人か。」

「3年3組に行つて、烏丸か秋月を呼んでもらえ。その二人が魔女狩りだ」

「烏丸、そういえばこいつ、支部長官という情報があつたな。」

「そいつなら、何か知つてそうだな。」

「でもこの格好じゃあ……」

「放課後なら、皆部活ほどの関係で服装はバラバラだから大丈夫だ」
「そうか、意外とこいつ親切なんだな。」

「でもなんでそんなこと、俺に教えるんだ？」

「ハンターが魔女狩りを殺そうと、俺には関係ないからな」

「そうだな、俺たちは魔法使いのために戦つてるんだもんな。」

「ありがとな」

「俺はその男に礼を言い、屋上から出ようとした。」

「最後に名前だけ聞いていいか？」

「……陽河悠夜」

「そうか、ありがとな悠夜。俺は陸奥和樹だ。また会えたらいいな」
「そついい残して、屋上を後にした。」

「下の階に降りると無数の生徒と先生が集まっていた。」
「君、上でものすごい音がしたけど」

ヤバ、速攻目立っちまった。

「俺もわからないです」

そう言って、生徒らを飛び越え、学校から逃げ出た。

学校から出てどうするんだよ、俺。

再び、俺は学校に忍び込むチャンスを得たため、夕方になるまで待った。

いくらなんでも今すぐ、また乗り込むのは無謀だからな。

第13話：薫奪還

何処か身を隠す所がないか、探してるうちに無意識に非公式魔術研究会があつた場所に来てしまった。

この高校に来て一番最初に来た場所。

「薫と耕介はどこいつちまったんだよ」

燃え落ちた痕跡ぐらい残っていてもおかしくないのだが。

建物だけが綺麗さっぱりなくなってることを、改めて再確認した。

「お前も魔女狩りハンターの一員か」

なっ……。

背後から知らない男が俺に話し掛けてきた。

でも魔女狩りハンターのことを知ってるってことは、こいつも関係者だ。

「だったらどうする？」

「つぶ、ついて来い、お前の仲間に会わせてやる」

仲間って言ったら、薫か耕介のことか

でも明らか罨ってまるわかりなんだが、ついていっていいものなのか。

「そんな警戒するな。俺たちでもちゃんと場ぐらいわきまえる」

敵の言う事など信じられるはずがない。

でもこのままずっとこの場にいても同じだ。

俺は罨だと分かかっていても、そいつについていくことにした。

「1つ忠告しておいてやろう」

足の動きは止めず、急にそいつが口を開いた。

「ほいほいと敵の言う事聞くんじゃねえぞ」

やっぱり罨か。

俺はそいつとの距離を空け、戦闘態勢に入った。

「忠告だつて言っただろ。今回は罨じゃない。本当に仲間に会わし

てやる」

歩みを止め、振り向かずそいつは喋りつづけた。

「信じられるか。それに仲間って誰のことを言ってるんだよ」

「北条薫。今俺の支部で捕らわれの身となっている」

「だから何だって言うんだ。いちいち俺に会わず解放すればいいじゃねえか」

「そのつもりだ。お前に直に引き取ってもらうために、ついてきてもらっているんだ。」

別に信じられないのだったら、そのまま帰ってもいいんだぜ」

そう言って、そいつはまた歩き始めた。

俺もまたそいつに小走りで近づき、やや後ろからついていくことにした。

「でも勝手に解放していいのか？」

「俺はこの支部長官だ。捕らえた敵を殺そうが逃がそうが俺の勝手だ。」

まあ、逃がせとるさい仲間がいてな。殺さず今まで置いといたわけだ」

「支部長官ってお前、烏丸鋭霧か？」

「ああ、そうだ。知らなかったのか？ てつきり知ってると思ってたぜ、陸奥和樹」

こいつ俺の名を……。

「本部はお前を捕らえたがっているが、まだこっちには命令が出てないから見逃しといてやるよ」

ますます意味がわからない。

俺を捕らえたがっているって、俺は魔法使いでもなんでもないんだぞ。

「ここだ。いくらお前でも敵の拠点に一人で入りそうにないから連れてきてやるよ」

っと入り口で待たされた。

「ここが魔女狩り南支部」

町から5キロぐらい離れた所に、高々と立っている古びた塔。
ここからだと思えないが、最上階まで登れば町が見えそうだ。

「一体どういうつもり？」

奥から薫の声が響いてきた。

「だからお前を解放するって言ってるだろ」

そう言っ、まだ手首に縄が縛られたまま、俺のところに突きつけてきた。

「それじゃあそいつは返すぜ」

その一言だけ言い、烏丸は塔の中に入って行っ。

「薫、大丈夫か？」

俺はとりあえず、薫の手首に縛られている縄をほどいた。

「一体何が目的なの？」

「え？」

「魔女狩りよ。私を解放する意味がわからない。ちゃんと説明してよね」

突然薫は立ち上がり、塔に向かって叫びだした。

「こんなことして、そっちには全く得なことがないじゃない。むしろ損のほうが大きいんじゃない？」

「薫、別にいいじゃないか。薫が戻ってきたことこっちにとっては嬉しいことなんだしさ」

「納得いかないの」

薫が小さな声で呟いた。

「納得いかないのよ。何も知らずにいいように踊らされるのが」

いいように踊らされるって何を言ってるんだ？

俺がいない間に何かあったのか？

「魔女狩りにはかなりの策士がいるわ。それだけは和樹も覚えておいて」

そう言っ、薫はスタスタと町のほうへ歩き出した。

確かに無条件で薫を釈放するのもおかしいが、これにどんな意味

があるのか今の俺には全くわからなかった。

「おゝ坊主探したぞ。薫も一緒か。耕介はどうした？」

町に入った途端、猛と出くわし、肩に手を回された。

「そのことで話があるの。後は誰が来ているの」

「俺たちAクラス全員勢ぞろいだぜ。その空家を使わして貰って
る」

つと猛が指を指した。

家がいつぱい並んでいて、どれかわからなかったが、よく見ると
美咲が手を振ってくれてたから辛うじてわかった。

俺たちはその空家に入り、とりあえず薫の帰りを祝い、そのまま
気持ちよく夜を明かすはずだった。

「みんなに話しておきたいことがあるの」

薫が急に険しい顔になり、皆をテーブルを囲むように椅子に座つ
た。

「穂多琉、急いで本部に戻って、軍を借りてきて。できるだけ全軍
を率いてきてちょうだい」

「わかった」

穂多琉はその言葉だけで、全てを察したのか、すぐに家を出て行
った。

流石は穂多琉、話の一だけ聞いて十まで理解したらしい。

当然俺たちは何で軍など必要なのかわからなかった。

「さて、まずあなたたちにはどこから話せばいいかしら」

つとわざとらしく聞いてきた。

「じゃあ俺がいなくなってから」

「耕介はなんでいないんだ？」

俺と猛が同時に喋った。

「それじゃあ和樹が援軍を呼びに行った後から話すね」
つと重たそうに口を開いた。

「とりあえず、今日は家に帰るぞ。ここに残っていても仕方ない」

耕介が、座っている薫に手を差し伸べ立ち上がらせた。

「和樹たちが戻ってくるまでは、私達は待機ね」

「そのことだが、俺に1つ策がある」

つと耕介は得意げに言い、学校を出て行った。

「策って、また無茶な策じゃないでしょうね」

耕介の後を追ひ、薫は耕介の横に並びながら歩いた。

「ごく普通の策だ。急いで本部には半日、戻ってくる時間をいれても1日だ。」

本部からの許可がでるまでさほど時間がかからん」

「何が言いたいの」

遠まわしに言う、耕介の策に薫は全く理解できなかった。

「明後日、魔女狩り南支部に夜討ちをかける」

「なんでそんな急ぐ必要があるの？援軍が来てからでもいいじゃない」

あまりにも危険すぎる策だったので薫は必死にそれを止めようとした。

たった2人で魔女狩り支部を落とすなど、無謀にも程があるからだ。

例え援軍が来ると分かっていたとしても、幹部や神兵が出てきたら、1時間もてばいいほうだ。

「何も真正面から突撃するわけではない。援軍がきたらすぐに中に入れるように、入り口を開放しておくだけだ。」

そうすれば、うまく事は運び、魔女狩りは統率がとれないまま、南支部は崩壊ってわけだ」

「そんなうまくいくかな」

薫が不安げに言って、耕介は家の前で振り返った。

「まあ、見てろって。不可能を可能に変えるってのが男^だってもん^だだぜ」

っと誇らしげに言い、家の中に入って行った。

第14話：夜襲（前書き）

前半は前回の続きの薫の話から入るため三人称……のはずです。

第14話：夜襲

次の日の朝、耕介は朝食を食べ終え、急に身支度を始めた。

「どこか行くの？」

「ああ、ちよつくら仲間集めてくるわ」

そう言うところ耕介は、薫の有無を聞かず、家を飛び出してしまった。薫も急いで後を追おうと、身支度を始めるが、既に耕介の姿はなかった。

仕方なく薫は耕介が戻るまでその家で待機することになった。

その次の日の夜、耕介はすごい勢いで帰ってきた。

「薫、魔女狩り支部に乗り込むぞ」

「帰ってきて早々なに？」

玄関入り口まで行くと、耕介は30人くらいの男を連れて帰ってきていた。

「予定通り夜討ちを仕掛けるって言うてんだよ」

「夜討ちってそんな寄せ集めの人たちも連れて行く気？返って足手まといよ」

「ちゃんと使い道は考えてある」

そう言つて、魔女狩り支部の目の前までやってきた。

「ねえあんた一体どれくらいの資金を使い果したの」

「ちよつとだよちよつと」

薫はAクラスに与えられている資金の心配ばかりしていた。

たかが2、3日でこの人数を集めるのはかなり金をを積まないと集まるはずがないからだ。

「それより見る。やつぱ見張りは手薄だ。俺の予定通りすぐには攻めてこないと思つてたんだろ」

自分の策が成功しかけに喜びを隠せない耕介。

見ると門番は二人、しかも二人とも居眠りをしていた。

「このまま突っ込むぞ」

「ちよつと、正面からは行かないんじゃないの」

「大丈夫だつて」

【真空斬】

「ぐはっ……」

剣で斬撃を飛ばし、居眠りをしてる門番は起きることなく、壁に叩きつけられた。

「どうして、必要以上の技を出すかなあ。普通に切り倒せばよかったじゃない」

「へへ、念には念をつてやつだぜ」

「今のあんたじゃ全然説得力ないわよ」

「よっしゃあ、このまま俺たちだけでこの支部を落とすぞ！」

「おお」

調子に乗った耕介は、30人の兵を連れて、真正面から魔女狩り支部の中へ特攻していった。

「入り口の掃除だけじゃなかったの？」

薫の叫びも虚しく、耕介達はどんどん奥のほうへ入って行った。

「もう、和樹は一体何をしてるの」

まだ来ぬ援軍を待ちわびながら、薫も耕介の後を追った。

塔の中は誰もがおかしいと思うぐらい、人の気配がなかった。

「耕介、これって罠じゃない？」

「考えすぎだつて、こんな真夜中だから皆寝てるんだろ」

っと進みつつける耕介達。

そして塔のてっぺんの大広間まで誰一人会わずにきてしまった。しかし薫は不審に思い、大広間に入る一歩手前で立ち止まった。

その瞬間、大広間へ繋がる入り口が壁で封鎖され、中から兵たちの叫び声が聞こえてきた。

「耕介、大丈夫なの？」

中からは太刀が交わる音が聞こえてきて、既に戦闘中なのかわかる。

「早く助けなきゃ」

【破壊魔法・ギガデリックス】

カラフルの玉をいくつも入り口を封鎖している壁にぶつけるが、傷1つつかなかった。

「どこまで強固な壁なのよ」

壁を破壊するのは止め、どこか違う通路がないか探し始めた。

「さすが一網打尽とはいかなかったですか」

後ろから男の人が話し掛けてきた。

「久遠時真幸」

薫が瞬時に振り向き、服の下に隠していた双剣を取り出し、その男の名を叫んだ。

その男は魔女狩り幹部会の一人、久遠時真幸だ。

幹部会はほぼ、本部を拠点として滞在していて、支部にいるのは珍しいことだ。

「はいそうです。あなたは魔女狩りハンターAクラスリーダー北条薫とお見受けしますが？」

真幸がにこやかに返事を返してきた。

「さすが幹部会ともなれば、私達の情報は全てお見通しってわけね」「それもありますけど、僕はこれでも軍師ですから」

幹部会でも軍師でもこの際関係ない。

和樹たちがここに来ないように知らせなきゃ。

そのためには私がここで捕まるわけにはいかない。

薫は耕介の救援を断念して、ここからの脱出を試みた。

【霧時雨】

辺り全体が霧で包まれ、周囲が見えなくなった。

「今のうちに脱出を」

見えない真幸に背を向け薫は走り出した。

「無駄です。イクシオン」

【ジゴスパーク】

真幸の魔力の化身イクシオンから一筋の電撃が迸り、背後から薫の胸を貫いた。

「あっ」

そのまま床へ倒れこんだ

「身体が・・・動かない」

必死に逃げようとするが、先ほどの電撃で全身が麻痺してしまい、身体が言う事を聞かない。

「とりあえず、あなたは使い道がありそうだから、生かしておきます」

そう言われ、薫は信徒に連れられ、牢獄に入れられた。

「うう・・・」

目覚めた時は既に日は上がっていた。

辺りを見渡すと、他の牢屋の中には誰も入っておらず、耕介の姿もなかった。

多分耕介のことだからうまく逃げ切ったのだろう。

いたのは見張りの・・・明日香だけだ。

ずっといてくれたのか、壁にもたれてそのまま眠っていた。

「明日香」

柵から手を出して届く距離だったので、薫は明日香の身体を揺す

った。

「ほえ？」

目を覚ました明日香は、まだ寝ぼけていたのかぼーとしていた。
「明日香起きて。あなた見張りでしょ？こんな所で寝てたら、私じやなかったら殺られてるわよ」

つと更に明日香の身体を揺すった。

「あ、会長。よかった、会長は無事で」

明日香が柵越しで薫に抱きついた。

「ハハハ、会長か。その名前で呼ばれるのも久しぶりね」

「はい。会長と離れてから一時も会長のことは忘れたことはありません」

「ありがとう、明日香。それで私はこれからどうなるのかしら？」

薫は自分の立場と現状を見極め、明日香と離れて言った。

「会長は解放されるみたいです。私と鬼庭君と必死にお願いしましたから」

「無条件でかしら？」

「そうだと思います」

薫はその言葉を未だ信じられなかった。

普通に自分を交渉の道具にされてもおかしくないからだ。

「あの、会長も魔女狩りに入りませんか？私がなんとか言って私と一緒にいられるようにお願いしてみますから」

「ごめんね、明日香」

薫は即答した。

「わたしはAクラスの魔女狩りハンターリーダーとして、そっちに寝返ることはできないわ」

「……」

「ごめんね明日香。あなただけ魔女狩りに入れてしまった」

「大丈夫ですよ。それでも結構ここは楽しいです」

明日香は笑顔でそう言った。

でも薫にはその笑顔が嘘の笑顔だとすぐわかった。

しばらく、沈黙が続き明日香が急に口を開いた。

「それとこれはどうしても会長の耳に入れておきたいと思ひまして」
「なに？」

明日香は真剣な眼差しで、話し出した。

「これは秘密事項なんですけど、明後日に本部で年に一度の魔女狩り主催のお祭りがあるらしいです」

「え？お祭り？そんなの聞いたことないわよ」

「し！外部には秘密事項なんですから、支部長官クラスまでしか知らされてないみたいです。」

「つということは普通の神兵では知らされないってわけか。」

「それを私、たまたま烏丸さんと久遠時が話してるのを聞いてちゃつて」

「よくやったわ明日香」

薫は優しく明日香の頭をなでた。

「エヘヘ」

「でもこういうスパイ行為は感心できないわよ」

「大丈夫です。会長だけですから」

明日香は最後まで笑顔で接してくれた。

そのあとは他愛もない話をして、烏丸が呼びに来た。
和樹が迎えに来た、と。

「これだけ詳しく話せば分かるでしょ？」

薫が疲れきった顔で、話し終えた。

「それと軍を動かすのどう関係があるんだ？」

猛が無神経にも薫に聞いた。

「・・・・・・和樹、説明してあげて」

え？俺が？

もう話す気力もなくなつた薫が俺に話を振ってきた。

また支部を総力をかけて攻めるとか？

それともその魔女狩り主催の祭りを潰す？

いや、これは絶対違うな。

それじゃあ耕介と何か関係あるのかな？

耕介があのと一体どうなったとかわからないし。

「なに？和樹もわからないの？じゃあ美咲は？」

痺れを切らした薫は今度は美咲に話を振った。

「えと、魔女狩り主催の祭りに奇襲をかけるのですか？」

美咲がおどしながら言った。

「そう。それだけの秘密事項が外部に漏れるはずがないとタ力をくくっている魔女狩りは、警戒を薄めるはず。

それを利用して私達が全軍で急襲するのよ」

「戦争か。腕がなるぜ」

猛は嬉しそうに雄たけびを上げた。

「でも場所は魔女狩り本部だろ？ヤバくないか？幹部会もメシアも当然いるだろ？」

「大丈夫よ、メシアは高みの見物だろうし、幹部会もメシアの護衛で忙しいわ。今回の私達は本部を潰すのが目的だから」

本部相手か。本部を相手にするにしても苦戦は強いられるだろう。それまでに俺が出来ることと言えば……。

今よりも強くなるだけだ。

「それじゃあ詳しく作戦を立てるのは穂多琉が戻ってきてからにして、今日はもう寝ましょ」

そう言って、薫は部屋に戻っていき、猛も美咲も部屋に戻っていた。

俺も部屋に戻ろうとし、電気を消し、2階に上がろうとした瞬間、ドアのノック音が聞こえた。

こんな時間に誰だ？

「どちらさんですか？」

「……………」

返事は全くない。

気のせいだと思い、2階に上がろうとすると、またドアがノックされた。

こういう場合は薫達に知らせたほうがいいのかな？

でも一刻を争う場合もある。

俺は決心し、恐る恐るドアを開けることにした。

ドアを開け、外には誰もいなかった。

やっぱり勘違いだと思い、ドアを閉めようとした瞬間、見た事ある人影が目に入った。

「耕介？」

うつすらだが、遠くで後ろ姿が見えた。

「おい耕介ー」

叫んだが、耕介は振り返りもせず、ひたすら歩いていった。

「しょうがねえなあ」

俺は仕方なく耕介を呼びに行くため、後を追いかけた。

第14話：夜襲（後書き）

大広間で戦っている耕介の話は独立編で語られます！

第15話：再会

「まったく、一体どこに行く気だよ」

何度呼んでも振り向かず、一向に距離も縮まない。
明らかにおかしいだろ。

それにこのまま進めば、たどり着くのは魔女狩り南支部だ。
そんな所に誘い込んで、耕介は一体どうするつもりなんだ。
しかし、魔女狩り支部が見えた辺りから、姿が消えいつの間にか、
近くの雑木林の中に入ろうとしていた。

「どうなっているんだ？」

この時、俺はあいつが耕介じゃないと感じたが、俺をここまで連れてくる理由が知りたく、その後を追った。

「確かこの辺りのはずなんだが……」

「誰だそこにいるのは」

急にライトを当てられて、しかも背後から襲われかけた。

「うち、しくったか」

こいつらは信徒か。

もしかしてこいつらが俺を？

次々に集まってくる信徒に俺はどうすればいいか戸惑った。
まさかこんな罠が待ち受けてるとは、予想外だったからな。

「待て、あいつじゃないぞ」

信徒の一人が言った。

どうやら誰かを探しているみたいだ。

「とりあえず邪魔される前に殺しとくか」

ピンチには変わりないか。

まあ、ざっと20人くらいだから、負けるはずは無いと思うんだが。

まずは一人命知らずの信徒が飛び込んでき、俺は受け流し、信徒

の方へ蹴り飛ばした。

これで5人くらいは逝ったな。

っと余裕をかましていたのだが、明らかに信徒の数が増えていた。まずいな、更に集まってきてるじゃねえか。

でも一人一人の戦闘能力は低いからなんとかなるはずだ。

次々に襲い掛かってくる信徒の攻撃をかわしつつ、確実に一人づつ仕留めていった。

猛との訓練は無駄にはなっていないようだ。

「あなたたち、一体何をしているのですか？」

男の声が響き渡った瞬間、信徒の動きが止まった。

「あなたたちの任務はその男の始末ではないはずですよ」

そう言った瞬間、信徒は散らばり始めた。

危なかった、体力が持つか心配だった所だ。

信徒全員が散り、その男の姿が現れた。

会ったことはないが、俺の知っている奴だった。

「久遠時真幸」

手配書でしか見た事なかったが、手配書の写真通りスマイル顔で現れたからすぐにわかった。

「川辺耕介の化身にでも誘われましたか？」

「耕介の化身？」

「その顔は凶星のようですね」

流石は幹部会だけあって、ものすごい観察力だ。

「俺を殺すのか？」

「いいえ、あなたの後を追えば、川辺耕介と接触できると思ったのですが、どうやら見破られてたみたいですね」

スマイル顔で話してくるせいで、全く殺気などは感じない。

でも話の内容がいまいち俺には把握できない。

「あなたはわからなくてもいいのですよ。川辺耕介もあなただけに会いたいみたいですから」

そう言っただけ俺に背中を向けて去ろうとした。

「待てよ。多人数じゃきついけど、一騎打ちなら負ける気は全くねえ」

俺はここで幹部会の一人、久遠時を討とうと試みた。

「あなたはまだ若いです。早死にする必要はありません」

つと振り向きもせず、歩を進めた。

「嘗めやがつて」

【ソウルイーター・裁き】

ソウルイーターを抜き、一気にけりをつけようとした。

頭上に円を描くように8本のソウルイーターが現れ、一直線に貫いた。

「っへ、幹部会も大した事ねえじゃ・・・うつ」

どこも傷は負ってないはずなのに、身体にものすごい激痛が走り、俺は倒れこんだ。

「情報を制する者が戦に勝つと言います」

確かに『裁き』で貫いたはずの久遠時が俺の目の前に立っていた。

「無闇に敵を挑発しないべきですよ」

流石に俺では相手にならないようだ。

「これは・・・」

俺から落ちたソウルイーターを見て久遠時は、初めて驚きを見せた。

「とうとう見つけました。3人目の使い手を」

3人目？もしかしてこいつはあとの二人の使い手を知ってるのか？

「こんな所で見つかるとは驚きでした」

「つく」

久遠時は倒れている俺の髪の毛を引っ張り、無理矢理立ち上がらせ、木に押し付けた。

「貴方はこれから僕の役に立ってもらいます。まずは・・・あなたのお味方の穂多琉によろしく言うておいてください」

なんで穂多琉にそんなこと言わねえといけねんだ。

その前に何故こいつが、穂多琉のことを名前で呼んでいるんだ？

「敵の言うことなんか聞けるか」

「別に構いませんよ。どんな行動をとっても貴方は僕の手のひらで踊ることしかできないのですから」

そう言っただの髪の毛から手を離し、ソウルイーターを俺のほうへ蹴り飛ばしてきた。

こいつ、自分がソウルイーターを持ってないことまで知ってる。

「ソウルイーターの使い手ならもう少し行動を自粛したほうがいいですよ」

そう言っただのいった。

それと同時にさっきまでうろついていた信徒の気配もパタリとなくなつた。

クソ、本当にムカつくやろうだぜ。

俺はソウルイーターを拾い、その場に寝転がった。

「自粛しろと言われたばかりじゃねえのか？」

背後から声が聞こえ、瞬時に立ち上がった。

「耕介、お前生きてたのか？」

声の正体は耕介だった。

「今はな。とりあえずこっちにきてくれ」

つと言っただけ言っただ、更に暗い奥のほうへ招かれた。

今はつて一体どういう意味だ？

俺はいろいろ疑問に思いながら、耕介の跡を追った。

するとそこにもう一人、血まみれで横たわっている耕介がいた。

「え？耕介が二人？」

「よくやった。もう消えていいぞ」

横たわっている耕介が、俺を連れてきた耕介に言い、そいつは一瞬炎と化し消えた。

「なんなんだあいつ？」

「俺の魔力の化身のドッペルゲンガーだ。動けない俺の代わりに誰か連れてくるように命じたのだが、運が悪かったな」

それは俺じゃ不満ってことか。

とりあえず耕介の出血量は異常だ。

早く薫達の元へ・・・

「和樹、俺のことはいいから、話を聞け」

「話より、まずは耕介の治療が先だろ」

「もう遅い。自分の身体のこととは自分がよくわかる。でも死ぬ前にお前たちに伝えなきゃなんねえことがあつて死にたくても死にきれなかったんだよ」

もう遅いとか誰が決めたんだよ。

「諦めたら終わりだ。だから・・・」

「触れるな」

耕介が傍らに刺してあつた剣を引き抜き、俺に向けてきた。

「いいから話だけ聞け」

俺はその威圧感に負け、傷だらけの耕介を目の前にし、何もせず話を聞いた。

「俺がお前らに言いたいことは3つだ。一つは今は絶対に軍を動かすな」

動かすなといわれても、もうそれは手配済みだから遅いんだけど・・・

「まさかとは思うが、薫は軍を動かそうとしていないだろうな？」

俺が顔を見て察知したのか、すぐに気づいた。

こいつも人の顔見て、人の心理を知ることができるのか疑わしい所だ。

「遅かったか。あれは魔女狩りの罠だ。敵がわざわざ寝首をかかすようなことをするはずないだろ」

「なんか信用できる奴からの情報だって」

「明日香か。あいつも利用されているんだ」

「利用って・・・その前にその明日香っていう奴はどっちの仲間なんだ？」

「そういえば、明日香が魔女狩りに入った時はまだいなかったんだな。まあその話は他の奴らに聞け」

「なんで教えてくれないんだよ？」

「ガハッ、悪いな、俺にはもう時間がないんだ」

耕介が血を吐きながら言った。

「おい、大丈夫かよ」

俺はうずくまって倒れそうになった耕介に近づき、背をさすった。

「2つ目だ。これを持っとけ」

つと、ロザリオのネックレスを自分の首から外し、俺に手渡した。

「なんだよこれ」

「3つ目だ。このことは穂多琉だけに伝える。それ以外の奴には口外するな」

耕介は焦っているのか、俺の意見など耳にいれず、淡々と話し続けた。

「そろそろお迎えが来たようだ」

「探しましたよ。川辺耕介」

そこには信徒を数人連れた久遠時がいた。

「行け。3つ目のことは絶対守れ。これは命令だからな」

そう言つて、俺を突き飛ばし、剣を持ち、久遠時に突っ込んだ。

「うおおおお」

「愚かですね。仲間を逃がすために自分が身代わりになるなんて」

あの傷で戦うなんて無茶だ。

でも・・・

俺は耕介の言葉を穂多琉に伝える義務がある。

それに耕介の話が本当なら、このままだとヤバイことになる。

仕方なく俺は耕介を置いて、薫達の所へ引き返すことにした。

第16話：嵐の前の静けさ

帰った頃にはもう既に日が昇っていた。

「和樹今まで一体どこ行つてたのよ。一番大切な時期に」

家に戻ると薫が、俺を押し倒し胸倉をつかみ今にも殴りかかろうとしている勢いだっただ。

「薫、今はそんな事をしている場合ではないだろう」

穂多流が出てきて、薫の右手を抑えた。

穂多流がいるってことは、もう本部からは兵を率いてきているってことか。

とにかくまずは穂多流に耕介のことを話さなければ。

「薫、穂多流と話がしたいんだがいいか」

「何？私には言えないこと？」

まあそう聞かれるだろう。

でもこれは耕介の遺言でもあるんだから、薫の耳に入れることは出来ない。

「ああ、薫には言えないことだ」

穂多流は俺が言いたいことを察知したのか、

「薫はいつでも出陣できるよう最終確認しておいて」

そう言うとき薫はしぶしぶ俺から退き、

「二人も尾行したら時間の無駄だもんね。いいわ、でも早く戻ってきなさいよ。ただでさえ時間が迫ってるんだから」

薫はそういう残して、家の中へ入っていった。

「それじゃあどこか移動したほうがいいわね」

俺はまだ何も言っていないのに、穂多流は勝手に誰もいない空家へ移動してくれた。

「大体話の見当はつくわ。耕介のことでしょ？」

俺に背を向け窓から外を見ながら、話を切り出した。

さすが俺の言いたいことの半分以上はもう知っていそうだ。

「耕介の遺言だ。今すぐ兵を引き上げた方がいい」

「その必要はないわ。既に策は用意してあるから」

「用意してまさか…、穂多琉はこれが魔女狩りの罠だと知っているのか？」

「大体はね、浅はかな罠だけど、こつちからわざとハマってあげてもいいと思ってね」

こつちからハマるってそんなことしたら。

「悪魔でも魔女狩りを少し泳がせるだけだから」

やっぱり穂多琉には隠し事とかできねえな。

あと言つとくことと言えば、このロザリオだけど

「なあ、耕介からこれを預かったんだが、何か意味があるのか？」

俺は穂多琉の隣に移動し、首にかけていたロザリオを穂多琉に突きつけた。

穂多琉は一瞬だけ俺のほうに目をやり、また外の方に目を戻した。

「命を粗末にして……」

「穂多琉？」

「そのロザリオ、肌身離さず持つてなさい。それとそれをまだ誰にも見せない方がいいわ」

「誰にもって薫にもか？」

「薫には特に見せてはいけないわ。さあ、話はこれで終わりでしょう？早く陣に戻るわよ」

穂多琉はそう言つてそそくさと空家から出て行こうとした。

「だからこのロザリオはどういう意味なんだよ」

そう言つと穂多琉は足を止めて

「その意味を知ったら和樹はロザリオの重さで潰れてしまうわ。だからまだ知らないほうがいいわ」

ロザリオの重さで潰れるってどう言う事だよ。

意味を知ったくらいで潰れるわけないだろ。

でも知らないほうがいいってことも、あるんだろうしここはこれ

以上追求しないでおう。

「あ、あと魔女狩り幹部会の久遠時と途中会ったんだけど、穂多琉によろしくだつてさ」

言わなくてもいいことだが、何故か急に思い出したから言う事にした。

「え・・・それは本当？」

大したことじゃないはずなのに、穂多琉は初めて驚いた顔を見せた。

そんなにビククリするようなこと言ったわけじゃないのになあ。

「この作戦には真幸が絡んでる...。だとしたら」

穂多琉は急に焦り出し、家の中をウロウロと歩き回った。

「帰らないのか？」

頭を抱えながら考えている穂多琉に一言言った。

そつえば、こんなに悩んでる穂多琉は初めて見たな。

つといつもと違う新鮮さに和んでいると、また急に外に飛び出していった。

しかも薫達がいるほうと逆の方向に・・・

「和樹、私はあとで合流するから、あとのことはお願い」

「お願いって何をすればいいかまったくわからないぞ」

一人置いてけぼりを食らった俺は、とりあえず薫達のところへ戻ることにした。

戻ると薫と猛の姿はなく、美咲だけがいた。

「あれ？他の皆は？」

「先に行っちゃいました。なんか兵の配置をしないといけないみたいなんで」

へえ、つで俺らは何をすればいいんだ？

「私達は合図があるまで遊んでいいみたいですよ。しかしカップルと装つてですけど」

カップルって・・・ええ？

まあそのほうが怪しまれないと思うのは確かなんだけど。

「ごめんねおさんが相手で。薰ちゃんとがよかったよね」

「いや、そんなことないって。美咲も充分可愛いつて」

俺より年上でも多分5歳くらい上なだけだろうし。

「とりあえず、俺たちもその祭りがあるって言う神社まで移動しようか」

「はい」

移動中いくらなんでも無言はダメだろな。

何か話題はないか。

「ところでその合図って一体なんなんだ？」

俺は思い出したかのように聞いた。

「神社の鳥居爆破が合図らしいです」

爆破するって怖い者知らずだな。

崇られても知らないぞ。

「それより似たことがどっかであったような気がするんだけどな」

「和樹さん、あれ」

考え事している途中、美咲がタチの悪い奴にに囲まれている、二人組みに指を指した。

「おい、お前らはこの方が誰か承知の上であたしらを絡んでるんだろうなあ」

一人は赤髪でショートヘアーでボーイッシュ、しかもものすごい口の悪い女の人だ。

そしてもう一人は顔の半分以上フードで隠していて、黒いローブを羽織っている人だ。

フードからチラッと見える肌の色からして多分女の人だろう。

それにしても女二人に複数で立ち向かうとは許すことはできない。

「美咲はここで待っている」

俺はそう言い、そいつらの所へ向かった。

「女二人に男が何人もいるってのはおかしくないか？」

「ああ？」

男たちは当然の態度で俺のほうを睨みつけてきた。

「おのれには関係ないだろ。わしらはこの女に侘びを入れると言っ
とるだけじゃ」

完全にヤクザじゃねえか。

まあ、今の俺だと普通のヤクザには負けない自信はあるけど・・・
「助太刀はいらねえぞ。こんな奴あたし一人で十分だからな」

そう言った瞬間どこからか、火炎放射器を取り出し、ヤクザたち
に振りまいた。

「あっちー」

この女本気だ。

つてか俺まで巻き添えが・・・

ヤクザたち数人は火達磨になり逃げ帰り、後のものはそいつらを
追いかけるように逃げていった。

「言っただろ？あたし一人で十分だつて」

そりゃあんな兵器を持ってたら、心強いよな。

「大丈夫でしたか？男の人が火達磨になって逃げて行くのが見えた
ので」

美咲が心配になったのか、俺を迎えに来てくれた。

「ああ、俺は大丈夫だ」

「なんだ連れがいたのか。この先は危ないから引き換えしたほうが
いいぞ」

引き返したほうがいいと言われても、俺たちはこの先の神社に用
があるんだけど。

「貴方達みたいな若い人に来られては困るのです」
フードをかぶった人が言った。

やっぱり予想通り女性の声だった。

それにしてもこの声、どこかで聞き覚えがあるぞ。

「貴方達も十分若いですよ。あなたと一緒にいる方なんて、私より
若いと思いますけど」

珍しく強気で美咲がフードを被った女性に言い返した。

「おい美咲、急にどうしたんだよ？」

「この人たち多分私達と同じ目的です。それにここで引き返したら入れないような気がして」

魔女狩りと言っても、恐らく幹部会ではないだろう。

幹部会の顔は手配書で全て覚えている。

それは美咲も同じだ。

つということは俺たちと同じハンターかもしれない。

でもさっきの強さを見れば、魔女狩りだという可能性も低くない。それにさっきの火炎放射器がなくなっているってことは、何かの能力者だ。

「あーめんどくせえ、お前たちもさっきの奴らと同様、丸焦げにしてやろうか？」

またどこからか火炎放射器を取り出してきて、俺たちのほうへ向けてきた。

「真里菜やめなさい。ここで犠牲者を出すわけにはいきません」
「でも」

「この二人は真里菜が守りなさい。私は自分の身くらい自分で守れます」

「それは危険です。私が・・・」

真里菜という女が何か言いかけた瞬間、フードの女性は何か耳打ちしたように見えた。

「わかったよ。お前らあたしから離れるなよ」

そう言っただけで先々行き始めた。

ってかこれから共に行動するって言うのに自己紹介もなしかよ。

「おい、名前くらい・・・」

「和樹さんだめ」

名前くらい名乗れつと言おうとしたが、美咲に止められた。

「相手の素性が知れない以上、こっちの素性も表さないほうがいいと思います。きっと向こうもそう思ってるはずです」

そうか、だから自己紹介もなしで・・・

「つつということは魔女狩り？」

「それはまだわかりませんが、ここからさきは慎重に行動したほうがいいです。あと言葉も選ぶ必要があります」

確かにな。

相手の考えがわからない以上、こつちのことはできるだけ隠す必要がある。

「とりあえず、今はあいつらについていこう。素性がわかればこつちも動きやすくなるからな」

第16話：嵐の前の静けさ（後書き）

更新が遅れてしまいすみません><

早くしないとは思っている1話に詰め込みすぎた気がします。でも最後くらいは余裕を持って書きたいです^^;

第17話：再会

二人はそのまま沈黙を保ち、俺たちがついてきていることも確認せずに先々と目的地に向かうだけだった。

素性をまったく表さないのがこれほどめんどくさい相手だとは知らなかったぜ。

美咲も俺と歩調を合わせて歩いているが、さっきから一言も喋らない。

きつと俺たちの会話が盗聴されている可能性があるからだろう。むやみにこつちからボ口を出すわけにはいかば……

「おいお前たちそこから先に来てはだめだ」

こんな所に見張り？

しかも見張りにしては数が多すぎる。ざっと数百人はいる。

パン

真里菜が不意にその見張りにショットガンを放った。

「いいからそこをどけ」

最後の忠告と言わんばかりに、真里菜は1メートルほどあるショットガンを、他の見張りに突きつけた。

しかし見張りはうるたえる事もせず、二人に襲い掛かった。

「俺たちも参戦して二人を……」

助けるぞつと言おうとしたら、美咲に止められた。

「あれは反魔女狩り連盟の兵です」

連盟の？だとしたら、連盟の兵達と戦っている、二人は俺たちの敵か。

「この兵達はおそらく伏兵として使われる予定だったのでしょう。あの兵達が片付いたら次は私達です。」

今のうちに二人の戦い方を知っておくべきです」

つということはやっぱりあの二人は魔女狩りか。

しかもこんな状況でもすばやく冷静な判断を欠かさないとは。

「それともここは見張りさんたちを囷にして逃げますか？ 私達では敵わない相手のようですし」

つと急ににこやかに言われ、不意をつかれた。

確かに二人の動きには全く無駄がない。

真里菜は敵と火炎放射器と体術で見張りとの距離を取りながら、確実に銃で仕留めていき、

黒いローブの女は、右手に紫の光を帯び、一步も動かずその右手で襲い掛かる見張りを迎撃している。

こいつらには人数というものは全く苦になつてない。

「和樹さん、ここは退くのが賢明だと思います。二人に全く疲れが見えません」

同感だ。疲れが見えてきた辺りから、不意打ちでもかましてやろうと思つたけど、無意味のようだ。

俺たちはその場から離れようと背を向けた瞬間、俺の真下の地面に銃弾が飛んできた。

「あたしから逃げれると思うなよ。ハンターさんよ」
バレてる。

「ここは俺が時間を稼ぐから美咲だけでも逃げろ。二人とも捕まつたらお終いだ」

「和樹さん一人じゃ無茶です」

俺は美咲の言葉を無視して、真里菜の火炎放射器を蹴り落とした。

「雑魚相手じゃつまんねえだろ？俺が相手してやるよ」

今の俺にできることは時間を稼ぐこと。

手加減なんかできる相手じゃねえし、最初からソウルイーターを使わせてもらおうか。

「あたしからしてもお前も同じ雑魚なんだよ」

つと真里菜は何処かからショットガンを取り出し、俺に向けてためらいもなく発砲した。

【ソウルイーター誓い】

目の前の複数のショットガンの玉を切り伏せた。
危ね、ちよつとでも『誓い』を出すのが遅れてたら蜂の巣になる
ところだつたぜ。

「やるじゃねえかそれじゃあこれならどうだ」

つと言いながらロケットランチャーを取り出し、狙いを瞬時で定め、放ってきた。

「どこからそんなもんとりだして・・・」

ドゴオーーーーーン

避ける間もなく、仕方なくソウルイーターを投げつけ、ロケットランチャーを空中で爆発させた。

俺はその爆風を利用し、真里菜と距離をとった。

爆煙で視界が悪く、煙が収まるまで、しばらくじっとしていたら、
何かが俺の肩を貫いた。

「な・・・」

「安心するのは早いぜ」

爆煙の中からリボルバーを持った真里菜が現れ、今度は俺の頭上にそのリボルバーを突きつけてきた。

「名も無いくせによく頑張ったな」

つとトリガーを引こうとした瞬間

「真里菜やめなさい」

見張りを全て倒したロープの女の人が、こっちに近づきながら軽く言った。

「ごちやごちやうるせえなあ」

「これは命令です」

今度はさっきの言葉とはうらはらに力強く叫んだ。

「っち」

真里菜は舌打ちをし、銃を消した。

こいつ、武器を召喚してたのか。

だから次から次へと武器が出てきてたってわけか。

「あなたがハンターにいるなんて、これは運命なのかしらね」

つとその場に落ちてあつた俺のソウルイーターを拾いローブの女は呟いた。

あれは陸奥の血を引いてる奴しかもてないはず。

「なんでお前もソウルイーターを持てるんだよ」

「・・・・・・・・」

俺の問いかけにローブの女は全く答えなかった。

「ソウルイーターって、隼人の紋章と同じじゃねえか。何か関係でもあるのか」

また隼人か。

あいつも陸奥の血を引いてないのにソウルイーターの紋章を身につけていた。

クソ、何がなんだかさっぱりだぜ。

「ここから先はあなたが来る場所ではありません。早急に自分の家に戻りなさい」

そう言つてローブの女は俺の目の前にソウルイーターを置いた。

「俺はお前に忠告される覚えもないし、命を助けてもらう義理もないぞ」

つと叫んでもローブの女は真里菜を連れて、黙って歩いていった。

「弟を心配しない姉がいるわけじゃないじゃないですか」

「え？」

一瞬そう言う言葉が耳の中に入ってきた。

「姉ちゃん？」

そう言つとローブの女は一瞬立ち止まったが、また歩き始めた。

あのローブの人が姉ちゃんだったら、ソウルイーターを持てるのも筋が通る。

俺は追いかけようとしたが、姉ちゃんに会えたという喜びと、その反面の裏切られるかもしれないという恐怖で、身体が動かなかった。

数分後どこから爆発音がし、俺たちが向かおうとしていた場所から、火の煙が上がり始めていた。

「作戦実行の合図か」

頭の中では行かなくてはならないと、わかっていても動く気すらサラサラなく、その場に座りこんだままだった。

どこから俺の道は変わっちまったんだ。

俺は何故、今魔女狩りと戦うことになってるんだ。

そついう考えがグルグル頭の中で回り始めていた。

「和樹」

「無事だったようね」

美咲と穂多琉が迎えに来てくれたようだ。

それじゃあ俺もそろそろ動くとするか。

「穂多琉さんから聞いたんです。やっぱりここにいた兵は皆伏兵だったそうです」

「対真幸専用に用意してたのに、こんなことになるなんて」

「……」

俺は無言で現地の神社に向かおうとした。

「迷っているの？信じられない姉の姿を見て」

「……」

穂多琉が思いがけない言葉を言った。

「やっぱりあの女の人は俺の姉ちゃんなのか？」

「ええ、あなたの姉でもあって、魔女狩りのトップメシアでもあるわ」

「穂多琉さんここで話すのは……」

「和樹には今迷いがある。この状態で戦われても迷惑なだけだ」

そつ言い穂多琉は真剣に俺の目を見つめてきた。

「全てを受け入れる覚悟はある？」

「真実を知れるなら」

俺も目をそらさずに穂多琉の目を見つめた。

「だったら死に急いだらだめよ。この戦いが終わったら全てを話してあげるから」

「なんだよ、今話してくれてもいいじゃねえか」

「今は一刻も争う時なんです」

美咲が横から入ってきた。

「私達の作戦が乗っ取られたといっても過言じゃないわね」

「乗っ取られたってどういう意味だよ」

「さっきの爆発は私達じゃありません。私達の作戦を知った久遠時が行ったことです」

「ということとは、あの爆発は」

「合図と関係ない爆発よ。だから今は兵達が混乱し、まったく統率が取れない状態」

「一般市民も巻き込まれ、大変なことになってるの」

「薫と猛はどうした？」

「行方知れずね。今は各自奮戦するのがいいいっぱい。探してるヒマなんかなかったのよ」

仲間は皆チリチリか。

「俺にできることはなんだ？」

「和樹は私と一緒に魔女狩りの将兵を討ち取り、美咲は一般市民の救援をお願い」

「わかりました」

「と美咲は一人で神社のほうへ向かっていった。

「和樹、これは雌雄決する一大決戦よ。敵を討ち取るのも大事だけど、自分の命を大切にしなさい」

そう言っ、穂多琉も神社のほうへ向かって行っ。

「っへ、全ての真実を知るまで死ぬわけないだろ」

「と俺も二人の後を追、神社に向かった。

第18話：過ち（前書き）

皆さん遅れましたけど、あけおめです！
今年もFUSEとも魔女狩りをヨロシクお願いします。

第18話：過ち

「なんだこれは・・・」

神社つという形はほとんど残ってなく、見えない所から子供の泣き声、その子供を捜す親の叫び声、

それに1秒でもいたくないというゴムみたいのが焼けた臭いが辺りを覆っていた。

「この光景どこかで・・・」

『お母さん』

「うつ・・・」

子供の声と10年前の出来事が重なり、めまいを起こした。

「たすけてく・・・がはっ」

俺に助けを求めてきた男が目の前で誰かに刺された。

「信徒か」

こいつらは服装が統一されてるからわかりやすいが、なんで罪のない市民まで。

しかもヘラヘラしながら何故殺せる。

「うつ・・・」

またさっきの出来事のせいで10年前の出来事がフラッシュバックされ、次々に蘇ってきた。

「やめろ」

罪もない市民たちを虐殺している信徒たちを、片っ端から殺していき、市民救援を援護した。

「今の俺は10年前の俺とは違う。守られる方じゃなくて守るほうだ」

穂多琉には敵将を討ち取る指示をされたけど、そんなことしてる間にも10人20人と罪もない人たちが・・・

「お前みたいな奴が、何こんなところで遊んでるんだよ」

「あ……」

俺はそいつの姿を見た瞬間声がでなかった。

「君、手が空いているなら……」

一般市民がその男の肩に手を乗せた瞬間、急に倒れた。

「俺に触れただけで死ぬとは生きる価値などない」

触れただけ？違う、こいつはさっきの人が触れた瞬間何かしたんだ。

「水無月龍二、何故こんな所に」

「どこにいたって俺の自由だろ」

水無月といえは今では魔女狩り最強の男。

そんな奴に俺が太刀打ちできるはず……いや、ここで俺がやらなきゃここにいる人は全員やられる。

「俺とやりあうつもりか？」

いつのまにか俺はソウルイターを抜き水無月に向かって構えていた。

「例え刺し違えてもお前を倒す」

「笑わせるなよ小僧。お前に刺し違えるほどの力があると思ってるのか」

その瞬間水無月は消え、頭にものすごい衝撃が来た。

「がっ……」

「そう簡単に死なれたらおもしろくない。もうちょっと耐えてくれよ」

地面に叩きつけられて、一回バウンドした俺の身体を蹴り上げ、今度は上空から地面に叩きつけられた。

全く攻撃できずにやられちまうとは情けねえ。

せめて1太刀……。

それに俺はこんな所で死ねないんだ。

「そうこなくては面白くない」

動かない身体に無理矢理ムチを打ち、ぶざまな姿だがかるうじて

立つことが出来た。
「でもこれでトドメだ」

【生命奪取】

その瞬間何か見えない手に、両腕と両足をわしづかみにされた感覚がし、身動きが出来なくなってしまった。

「ぐ・・・が・・・ぐはっ・・・」

何か見えない物体が次々に俺の身体を貫通していき、徐々に体力を削られ、意識が遠のいてきた。

「龍二ーーーー」

ある男がそう叫びながら棍を振り回し、水無月に突撃していった。それと同時に俺の呪縛も解け、両腕と両足をつかまれている感覚もなくなった。

「大丈夫か和樹」

この声はどこかで聞いた声。

「なんとか治せる傷よ」

目も開けられない瀕死の俺を誰かが、抱きかかえてくれてるのがわかり、徐々に痛みも和らいでいき、俺は目を開けた。

「光明寺、それに音葉に琴葉」

「今は喋らないで」

【ヒーリング】

音葉の腕の中で琴葉に治療される俺。

「本部の隅っこで怯えとると思ったら、こんな弱い者虐めしとったんかい」

「それはこっちのセリフだ。あれから全く姿を現さないで、どこに隠れていたんだ」

「アホぬかすな。次から次に刺客差し向けといて、こっちは端から

戦う気満々や」

「それじゃあ久しぶりに楽しませてもらおうか」

「嫌になるくらい楽しませたるわ」

そう言った瞬間二人の姿は消え、ものすごい風が俺たちに襲ってきた。

「一体なにが起こってるんだ？」

ほぼ傷が癒えた俺でも、何が起きているのかわからなかった。

「大和の棍と水無月の爪がぶつかりあってるの」

音葉がそう説明してくれた。

「じゃあなんで姿が見えないんだ」

「見えないんじゃないくて、和樹君が見切れてないのです。ものすごい速さで移動してるから無理はないですけど」

次は琴葉が説明してくれた。

「じゃあさっきまで戦っていた水無月の力って……」

「1割も出してないと思います。多分二人ともまだ小手調べ程度です」

マジかよ。これで小手調べってどれくらいの強さなんだ。

しばらくぶつかりあった後、二人は距離を取り、にらみ合いながら次の攻撃に備えていた。

「音葉、琴葉、お前ら二人は和樹と一緒に市民の救助に回れ。ここはワイひとりでええ」

「足手まといを逃がすか。だったら場所変えないか？俺は大和と思いい切り戦いたいからな」

「龍二にはおもしろいこというやんけ」

そう言うた龍二はついて来いと、アゴで合図し、何処かに行ってしまった。

「あいつは任せろ。お前ら3人は今自分ができることをせえ」

「うん。あんな奴に負けちゃダメだからね」

「任しとけ」

そう言って、光明寺も水無月の後を追った。

「私があつちにいくから琴葉は和樹君と一緒に向こうをお願い」
音葉はそう言い、一番被害が大きそうな境内のほうへ入って行った。

「和樹君私達は入り口付近の市民を助けましょ」

「ああ」

俺は倒れている人を一人一人、息があるかを確認して回り、息のある者を被害に会わない所まで移動させた。

その救助活動してる中に思わぬ人物がいた。

「お姉ちゃん」

間違いない、あの黒いローブ姿、しかも今回はフードを外していて、お姉ちゃんだとはつきり確認できた。

でもどうしてそんなことしてるんだ。

信徒にこういう命令をしたのはメシアであるお姉ちゃんのはずだ。意味がわからない。

こういうことは、直接本人に……

俺は救助活動中のお姉ちゃんの目の前に立った。

「和・・樹・」

やっぱりお姉ちゃんだ。

「……」

「そんな所に突っ立ってないで和樹は早く逃げなさい」

お姉ちゃんはそう言い残して、その場を立ち去ろうとした。

「メシアならこんなこと止めるように命令すればいいだろ。」

こんな所でチマチマ何をやってるんだよ。そんなことしても、被害は広がる一方だろ」

俺はいつのまにかそんなことを口走っていた。

「それができたらこんな苦労しないわ」

「お姉ちゃん？」

「メシア様、こんな所にいたのか。早く逃げないと……」
真里菜が慌てて、お姉ちゃんに近づき逃げるように促した。

「嫌です。一人でも多くの市民を救うのです。そのために真里菜も手伝ってください」

「どうということだ。」

「やってることと言ってることが違うじゃねえか。」

「確かにさっき暴れてたのは魔女狩りの信徒だ。」

「水無月もいたから魔女狩り仕業には間違いない。」

「っということはやっぱりお姉ちゃんは魔女狩りなんかじゃないってことか。」

「でも穂多琉ははっきり言っていた。」

「魔女狩りのトップメシアであると。」

「真里菜もさつきからお姉ちゃんのことをメシアと呼んでいるからそれは間違いないだろう。」

「その命令は聞けません。早く本部に」

「真里菜が必死に言ってるのに、お姉ちゃんはそれを聞く耳を持たずに救助活動が続けている。」

「真里菜の言うとおりですよ。メシア様」

「久遠時。あいつまで現れるとは。」

「真幸。あなたはなんてことをしてくれましたか。せつかくのお祭りを」

「反魔女狩り連盟を滅ぼせと言ったのはメシア様じゃないですか」

「ですがこんなことをする必要は・・・」

「これが一番効率の良い策なんですよ。かならず吉報を持って帰りますのでメシア様は本部にお戻りを」

「あの久遠時が腰の位置辺りまで深くお辞儀を言っている。」

「でもそれにも関わらずお姉ちゃん、メシアは全くもって聞く耳をもたない。」

「言っても無駄だとわかった久遠時は、頭を上げメシアであるお姉ちゃんに手で斬撃を飛ばし、頬をかすめた。」

「これだけ言っても聞かないのであれば、力づくで戻っていただきますよ」

「おい久遠時、メシア様に向かつて」

真里菜が前に出て久遠時を止めようとしたが、お姉ちゃんは真里菜の行方を右手でさえぎった。

「別に構いません。、黙っ怒り狂った強い者の猛攻よりも、子供のすすり泣きの方が痛いわ。」

和樹ならこの意味わかるでしょ」

急にお姉ちゃんは俺に話を振ってきた。

もしかしてお姉ちゃんも10年前のことを・・・

「何をわからないことを言っておられるのですか。猛攻のほうが痛いに決まってるじゃないですか」

その言葉を言い終わった瞬間、久遠時が剣を召喚し、お姉ちゃんに襲い掛かった。

お姉ちゃんはまったく防御のしせいもとらず、そのまま突っ立っていただけだったが、間一髪で真里菜が防いだ。

今気づいたが、もしかして、これは内乱なのか。

水無月や久遠時が謀反を起こし、命令違反をしているっていうことか。

でもそれだったら魔女狩りの本部を抑えれば終わりのはず。いや、久遠時は確か、俺たち連盟を滅ぼすとも言っていた。

じゃあ俺たちがここに集まることを久遠時は気づいていたってことなのか。

「小僧、メシア様を連れて逃げろ」

久遠時に押され気味の真里菜が叫んだ。

「いけません。真里菜では真幸には敵いません」

小僧とは俺のことだ。

何故かいつの間にか、魔女狩り内の戦いに巻き込まれてしまったが、俺はお姉ちゃんの手を引っ張り、神社からでようとした。

「和樹」

俺は夢中で走った。

とにかくお姉ちゃんをここから離れた場所に連れて行かないと危

ない気がした。

「和樹」

神社からかなり離れた所で、お姉ちゃんが無理矢理俺の手を振り解いた。

ここまでくればもう安心だろ。

「和樹は10年前の出来事を忘れてしまったのですか」

あんな出来事忘れるはずもない。

「今まさにあの10年前の二の舞になろうとしているのよ。」

あの時は和樹一人しか、守れなかった、でも今は止めることができる。それをどうして邪魔をするの」

「意味がわからないよ……」

「和樹？」

「この騒ぎは魔女狩りの仕業なんだろ。例えこんなこと命令してなくても、こんなことが起きる前に

防げたんじゃないのかよ。それになんでお姉ちゃんだけなんだよ。

水無月も久遠時そんなこと全くしてなかったぞ」

俺はつい感情的になってしまい、自分でも理解しにくいことを言ってしまったと思った。

「……」

「なんでそこで黙るんだよ」

その時、神社を中心に大規模な爆発が起こった。

まるで10年前を再現するかのような爆発だ。

あの規模だと神社にいるやつは勿論、周囲にいる奴も危ないぞ。

かなり離れている俺たちの所まで、爆風がひどく、色んな物が飛んできた。

って待てよ、あそこには穂多琉達がまだ残ってるんだぞ。

それに音葉と琴葉も……

俺は全ての力が抜け、膝から崩れおちた。

「所詮、人は無力ということですね」

お姉ちゃんがフードを被り、俺に背を向けた。

「こんな想いしなくなったら、これ以上関わらない方がいいわよ」
「お姉ちゃん？」

そう言っで、お姉ちゃんは黒い霧に包まれて、姿を消した。

「ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう……」

地面に力いっぱい拳を叩きつけながら、俺はただただ、嘆くしかなかった。

第18話：過ち（後書き）

旅立ち編も残り1話ということになりました。

今までお付き合いいただいた方、あとただけお付き合いください。
でも旅立ちが終わった後もまだ独立、逃亡、崩壊、決戦、とまだ4
章分も残っているので終わりはまだまだですけどw

第19話：新たなる旅立ち（前書き）

すっごい間が開いてしまつてすみません。

作者でさえ、前話の話を忘れてるぐらいですから、もう一度読み直していただくことをオススメしますw

第19話：新たなる旅立ち

1 段落して俺は立ち上がり、爆発が起こった場所を確かめることにした。

正直見に行くのは怖かった。

人の死体はもちろん、何より仲間の死を見届けるのが怖かった。でもその不安は一瞬にして消し去られた。

もと神社であつた場所は何もない荒地になっており、人ひとりもおらず、建物があつた痕跡すらも残っていなかった。

10年前と全く同じ光景。

「うつ・・・頭が」

ものすごい頭の痛みを感じ、立ちくらみをし、その場にしゃがみ込んだ。

一瞬10年前の記憶と今の現状と重ならない部分があつた。

光景とか全ては10年前と誰が見ても同じなのに、何か変な違和感に包まれた。

「ぐっ・・・」

それを思い出そうとすれば、更に頭痛が激しくなる。

そうだ、こんな想いをしたのは初めてなのか。

でもそれだと10年前の出来事は・・・。

考えれば考えるほど頭の痛みがひどくなってくる。

「うわぁー」

俺はひどい頭痛にやられ意識を失った。

もしかすると思ひ出してはいけないものを思い出そうとしていたのかもしれない・・・。

・

・ ・ ・ ・ ・
「俺が二人？」

「違うよ、この子は君とは別人だよ」

白衣をきた男の人が俺に話し掛けてきた。

向かいにいるもう一人の俺は俯いているだけで、生気は感じられない。

場所は研究所っぽい場所だ。

そうかこれは昔の記憶だ。

「和樹？」

部屋の扉が開き、お姉ちゃんが俺に歩み寄ってきた。

「本当にこっちが和樹なの？」

「ああそうだよ。成功とはいえないが失敗ではない。綾乃君には悪いが・・・」

「違う、じゃあこの子は一体誰なのよ」

お姉ちゃんが俺とは違うもう一人の俺に指を指して叫んだ。

「この子が我々の研究の成果だよ」

「違う、和樹はこんな人形みたいなのじゃない。返して、返してよ私の弟を」

お姉ちゃんはその白衣を着た男の人に、何度も両手で力なく叩きながら泣き叫んだ。

僕はここにいますよ。

俺はその一言が何故か言い出せなかった。
それは目の前に僕がもう一人いたからだ。

・ ・ ・ ・ ・
「ん？」

目を覚ましたら、俺は何処かの布団の上に寝かされていた。
誰かが運んでくれたのだろうか。

場所はただの小さな小屋の中で、布団以外なにもなく、全く生活
感がない小屋の中だった。

それにしてもあの記憶は一体なんだったのか。
思い出そうとするとまた、頭に激痛が走る。

あの時、お姉ちゃん俺ではなく、俺に似たもう一人の奴を和樹と
呼んでいた。

だとすると俺は誰なんだ？

「ぐあ・・・」

また意識が飛びそうなほどの頭痛が襲ってきた。

「これ以上考えるのは今はやめた方がいいわよ」

小屋のドアが開き、そこから穂多琉が入ってきた。

「無事だったのか？よかった、もうてつきり死んじまったのかと」

「私達がそう簡単に死ぬはずないじゃない、薫も美咲も皆生きてる
わよ。今は出払ってるけどね」

「マジか？音葉と琴葉たちも無事なのか」

ハンターの仲間ではないけど、一応心配だったので聞いてみた。

「そいつらもいたの？でもあの爆発の中にいたんじゃ生きている方
が難しいわね」

でも返ってきた答えはいい返事ではなかった。

そりゃあれほどの爆発で全員無事なのは奇跡に近いだろう。

「とにかく今は寝てなさい。あなたは今極限の混乱状態に陥ってるから」

そう言つて穂多琉は、俺を無理矢理寝かしつけた。

でも今は寝ている場合じゃない。

自分のこともそうだけど、あの後のことも気になる。

「ちよつと聞きたいことがあるんだけど、いいか？」

俺は横になりながら、隣で座っている穂多琉に話かけた。

「私が答えれることならいいわよ」

「まずは俺は誰なんだ？」

「変わったことを聞くのね。あなたは陸奥和樹。それ以外なんでもないはずでしょ」

穂多琉は淡々と答えた。

俺はさっきの過去の夢の話をした。

俺と似たもう一人の奴がいて、お姉ちゃんがそいつのことを和樹と呼んでいたこと全て。

「もうそこまで思い出しかけてるのね」

予想外の答えが返ってきて驚いた。

一体どこまで俺のこと知っているのか。

何故そこまで詳しいのか、不気味なくらいだった。

「疑われてもしかたないわね。でも私もつい最近知ったの。和樹の監視役選ばれた時からね」

意味がわからない。何故俺が穂多琉に監視されなきゃならないんだ。

「単刀直入に言つと、あなたは人造人間。氷室教授に作られたもう一人の陸奥和樹。でも本物の陸奥和樹もあなた」

意味がわからない。俺は普通の人間じゃないっていつのかよ。

じゃあ俺じゃないもう一人の俺は一体誰なんだ？

それを聞こうとしたが穂多琉が話を続けた。

「事件は10年前、片桐源一郎が起こした爆発で本当はあなたは死んでいたの」

あの事件か。でもあれはお姉ちゃんが守ってくれて……

「それは作り出された記憶よ」

うそだろ……

「だから陸奥綾乃もあなたを置いて出て行き、もう一人の所へ行った」

そうだ、あの時もう一人、俺と同じ姿をした奴がいた。

「そのもう一人って奴はいまどこに？」

「綾乃と同じ魔女狩りよ。あなたも一回会ったことあるはず」

うそだ、うそだ、うそだ、俺と同じ姿した奴がいたら、すぐに気づくはずだ。

「当然容姿はあなたとは、全然違うわ。あなたは作られた体だからね」

「……」

俺は全く頭の整理が追いつかず、自分でも考えているのか分からず、ただただ時間だけが過ぎていった。

そして長かった沈黙は穂多琉の意外な言葉で破られた。

「冗談よ」

穂多琉が軽く笑って言った。

「へ？」

「全て冗談、あなたは何も気にしなくてもいいの」

クソ、タチ悪い冗談はやめろよな。

「あの夢はなんなんだよ。どうしてそんな嘘を……」

「夢は所詮夢よ。和樹は何も考えなくていい」

「は？」

話の途中、ドアが開いた。

外からは薫と美咲と猛がいた。

「おお目を覚ましたか坊主、心配したんだぜ」

「和樹さん大丈夫でしたか？」

「お騒がせしてすみません。なんとか無事です」

本当、皆無事でよかった。

「穂多琉、やっぱり穂多琉の言う通り、本部は壊滅、とても再興できる状態じゃなかったわ」

「やっぱりね。それより薫も和樹の目覚めを喜んだらどう？」

「今はそんな時じゃないでしょ？本部が落ちたのよ。他の支部も壊滅。これから私達はどうすればいいっていうのよ？」

本部が落ちた？一体どう言う事だ？

俺が寝てる間に何が？

「まんまと敵の計略にハマってしまつて、連盟は壊滅状態つてことよ」

穂多琉が俺にわかりやすく、説明してくれた。

残ったのは俺を含めて、5人。

他のやつらは、本部救出に向かう途中、迎撃されたりで戦死したらしい。

「英雄王はどうしたんだ？本部にはそいつがいたんだろ？」

「消息不明さ」

猛が言つた。

「とりあえず、今日はゆつくり休みましょ。行き詰つた時は、決してうろたえず、無理をせず、十分に休養して力を養うのも一策です」
美咲が両手を合わせてそういい、料理の支度を始めたした。

「おお、俺も手伝うぜ」

猛も槍を壁に立てかけて、調理場に向かつた。

「確かにそうね。こういう時こそ休養が必要ね。ちょっと風に当たってくるわ。できたら呼んでちょうだい」

そう言つて、穂多琉は出て行つてしまった。

それについていくように薫まで出て行つた。

俺も少し外の空気でも吸ってくるか。

布団から起き上がり、外に出た。

山の中らしく、回りには木が立ち並んでいた。

「ちよつと、穂多琉まで逃げ出す気」

奥から薫の声が聞こえてきた。

「少し別行動をするまでよ。必ず帰ってくる」

「どうしてそんな嘘をつくの。穂多琉は仲間だと思ってたのに」

俺は悪いと思いつながら、隠れて聞き耳を立てていた。

「私がいたら、和樹をダメにししまいそうだ」

「どういう意味よ？」

「和樹に本当のことを話すのは早すぎただけよ。それにあれで誤魔化せたとも思えないし」

「本当のことってなんなのよ」

「それは薫が知る必要はない。薫には薫にしかできないことをして」

「その間穂多琉はどうするのよ？」

「それは・・・言えない。でも信用してほしい。必ず帰ってくるから」

薫は考えているらしく、長い沈黙が続いた。

「わかった。穂多琉のこと信じるわ。それで私にしか出来ないことって何？」

「今、和樹は例のロザリオを持っている」

「どうして？あれは耕介が受け継ぐはずだったんじゃない」

「このことか？」

俺は服の下に隠していた、耕介から預かったロザリオを取り出した。

「薫も薄々気づいているはずだけど、耕介はもうこの世にいない。ただど死ぬ前に希望を和樹に託したの。」

「私がいたらその希望まで壊しかねない」

「・・・うん、わかったわ。後のことは私に任せておいて」

「ありがとう」

そう言って、穂多琉は一人で先へと進み、姿を消した。

俺も聞き耳立ててるのバレないうちに戻るとするか。

「明日から、私達は魔女狩り本部を攻める準備をするわ」

食事中、薫が急に言った。

「確かに今は攻めどきだが、4人じゃあ向かい討たれるのがオチだ」
猛が異を唱えた。

「今が攻め時にしても、準備してる間に好機は失ってしまいますよ」
続いて美咲も反論した。

「その前にどうして今が攻めどきなのか教えてくれ」

俺だけ、意味がわからず、質問した。

「ああ、例の爆発、あれは魔女狩りの内乱の結果」

「謀反人が現れたんです。幹部会の大半が寝返ったと聞いてます」

美咲が付け加えて教えてくれた。

思い当たる節がいくつもあった。

お姉ちゃんの言う事聞かない久遠時、お姉ちゃんも知らなかった計画。そして、久遠時に肩入れする水無月。

つということはお姉ちゃんが危ない。

「お姉ちゃんを助けにいく」

「はあ？和樹、戦いに私情をはさむもんじゃねえよ」

猛に怒られた。

そりゃそうだろ、敵を救うって考え事態・・・

「和樹がそう言っただったら仕方ないんじゃない」

「え？」

薫が予想外の言葉を発した。

「本気でいつてるのかよ」

「ええ、猛もそれを見たらわかるんじゃない？」

そう言っ、俺の服の下に隠していたロザリオのネックレスを、引っ張り出した。

「おまえそれ、連盟の後継ぎが持つはずのロザリオじゃねえか」

「つということは今連盟長は和樹さん？」

ええ~~~~。

この口ザリオがそんな意味をもつ物だったなんて。

「まだこれがある限り反魔女狩り連盟、魔女狩りハンターは死んでないわ」

「まあ、連盟長の命令じゃ仕方ないか」

「これで再興も夢じゃないですね」

俺の存在の意味。穂多琉の言う通り、俺は普通の人間じゃないかもしれない。

でも今はそんなことはどうでもいい。

お姉ちゃんを助け出せばそれも、明らかになるだろう。

今は自分の信じた道を進むのみ。

俺の本当の旅はここから始めるのだろう。

第19話：新たなる旅立ち（後書き）

色々詰め合わせすぎた感がありますが旅立ち編はこれで終わりです。まあ3章のための伏線みたいな感じですね、旅立ち編と次回の逃亡編は。まあ途中挫折しないよう頑張りますので応援ヨロシクお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1616c/>

魔女狩り～旅立ち編～

2010年10月8日15時06分発行